

---

# 記憶屋

国見遥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

記憶屋

### 【Nコード】

N7597C

### 【作者名】

国見遥

### 【あらすじ】

親に愛されていない。そう思い続ける速水幸成。何よりも両親に愛されたいと願っていた。そんなある日、速水幸成の携帯に一通のメールが届く。それは記憶屋からのメールだった。そこには「あなたの見たい記憶を差し上げます。値段は記憶を見たご本人がご自由にお決め下さい。」と書かれていた。一見いたずらと思えない内容。そのメールに最初は完全に無視していた幸成だったが・・・。

## ブローグ

十二月二十三日。月曜日。天気、晴れ。時刻、十四時四十七分。

寒空は、澄み渡っている。

今日から冬休みに突入する。もうすぐクリスマスということで街はカップルで溢れている。恋人のいない俺にとってはどうでもいい一日だ、クリスマスなんて。

「幸成さあ」

隣にいる古谷優一が肩を叩きながら言った。

「なに？」

「お前冬休みの予定あるの？」

「べつに。特に無いよ。寝正月だな」

「正月の話じゃないよ。クリスマスですよクリスマス。ご予定は？」

「クリスマス？嫌な響きだなあ」

「お互い寂しいシングルですからねえ」

「なんで敬語なんだよ」

優一はいい奴だ。成績もかなり良いし、スポーツも出来る。サッカー部では一年生ながらレギュラーだ。一年生で現在レギュラーなのは優一と藤原茂久だけで、期待の一年生である。優一のポジションはMFで茂久はFWだ。

「優一って女にもてるくせに彼女つくらないんだな。まさか、男色

の方ですか？」

「なんで敬語なんだよ」

「男色には全く触れずですか。本物？」

「殴りますよ？」

友人というのは良いもので、こうやって馬鹿話してるだけで力をくれる。時にはその存在が足を引っ張ることもあるが少なくとも俺には友人って奴は力をくれる、大事な、大事な、本当に大事な存在だ。

澄み切った寒空を見上げながら優一は

「彼女でもつくろっかなあ」

と独り言のように言った。

「優一って好きな奴いるの？」

「好きな奴ねえ。俺のこと好きって人は結構たくさんいるんだけどなあ」

「それは知ってるよ、モテ男くん」

優一は顔は良いし、性格は良いし、女にもてて当然のような奴だ。女の子とも自然に話せるしそりやもてる。ただ、彼女は作らない。小学校、中学校は別だったし、あまり過去の恋愛話をしたがないので昔のことは知らないが、すくなくとも高校に入学してからは彼女を作ってはいない。

「お前に言われると腹たつ。成績は学年トップだし運動神経いいし、顔は女みたいに綺麗な顔してるし。お前こそもてるっつーの」

「へえ」

「へえって、他人事かよ。才色兼備ってのは速水くんのことを言うのだよ」

「その顔がネックで女作れないんだけどな」

「なんでだよ。男前のせいで彼女できないってわけわかんないよ」

わけわからないと言われても、事実だった。自分の顔が整っているのは重々わかつている。だからこそ駄目なんだ。女の子に好きと言われてもその子が好きなのは自分の顔であって、俺自身を好きだと思ってくれているとはどうしても思えない。周りが自分の外見以外を見てくれていると思えない。それは中学からの悩みで、その悩みはいつになっても無くならないと思っていた。恋人なんて自分には出来るはずが無い、ましてや恋なんて出来るはずがないと思っていた。

「幸成こそ好きな奴いるの？」

突然の問いにドキツとする。平静を装い、

「さあ」

とだけ返す。

横から顔を覗きながら優一は、

「神崎美紀ですかあ」

と凶星を突いてきた。

「別に、神崎は」

俺の言葉を遮る様に優一は、

「好きなら好きでいいじゃん。隠すなよ」

神崎美紀は同じクラスで学年のアイドルのような存在だ。他人との関わりがあまり得意ではない俺にとって、優一や神崎のような性別問わずに別け隔てなく話せ、接することが出来る人がうらやましくて仕方が無い。才色兼備ってのは優一や神崎のような奴を言うんだ。俺みたいな奴のことじゃない。

「・・・いつから気づいてた？」

振り絞った声。照れからの限界ギリギリの問い。

「入学してすぐかな」

「そんな早く？」

「わっかかりやすいんですよ、速水くんは」

「そんな分かりやすいかな？」

「バレバレ。皆知ってるんじゃない？」

恋ってというのは自分以外のする行為で、ましてドラマのような感動的なハッピーエンドはブラウン管の中だけの話だと思っている。自分に彼女が出来て、その彼女と燃えるような恋愛をする。まるで夢物語だ。ありえない。きつと、ありえない。

「なんで分かったの？」

優一は笑いながら、

「他の子とはあんまり話そうとしないけど神崎とは話そうとしてるじゃん。あんまり努力は報われてないけど。緊張しすぎなんだよお前」

自然にしてるつもりなのだが、どうやら駄目のようだ。出来る奴からしたら不自然極まりないようだ。

「一生変わんないよ、この性格は。子どものころから女の子と話すの苦手だし。ってか無理。普通に話せない」

女の子に顔を見られるのが極端に苦手なのだ。顔を見られながら喋ると、喋っているのは確かに自分なのに女の子が喋っている相手は自分ではないという錯覚に陥る。相手にとっては速水優一ではなく速水優一という男の皮なのでは、と考えてしまう。気がつくとも目の前の相手の存在が虚ろになり、やがて自分自身が虚ろになっていく。それは個を完全に破壊していき最終的には世界をも壊す。それが、

どうしても耐えられない。

「でもさあ、なんか優一変わったよな」

「そうかあ？」

「なんか・・・なんとなく元気になった・・・かな？」

その通りだった。あれから毎日が楽しくて、いままでと同じことも全く違うように見える。世界を変えるのは無理だと思っていた。しかし、世界は簡単に変わった。世界とは自分の中にあり、自分が変われば世界は追従するように驚くほど簡単にその姿を変える。その事実は意外に誰もが知っていて、それでいて、誰もが見落としている確実な事実だ。

「確かに、変わったかも」

「だよなあ。なんかあった？まさか、実は神埼と既に付き合ってるとか？」

「それはないよ。そうだったら真っ先にお前らに言ってるよ」

「そっか。じゃあ何があったの？」

「特になんにもないよ」

「何にも無いのに人が変わるかよ」

「何にも無いんだから仕方ないじゃん」

嘘。もちろん神埼と付き合っているわけではない。ただ誰にも言わないという約束なのだ。事実を他人に伝えるのは規則違反であり、親友にもそれは言えない。だが何かがあったのは紛れも無い事実だ。とにかく優一にも、言えない。

「あつ、ちよつと待って。銀行よっていい？」

「なにすんの？」

「ちよつとな」

しなければならなかった。お金を振り込まなければなら  
ない。

銀行に入ると、ＡＴＭの前に立つ。口座番号を指定して、財布から  
お金を取り出し入金。これで財布の中身はすっからかんだ。

「わりい。お待たせ」

「んで、なにしてきたの？」

「ネットで買い物してさ、その金払ってきた」

「いくら？」

「四万円」

「そんなに？何買ったんだよ」

「ちよつとな」

一人で旅行がしくて貯めた金。それを全額、払ってきた。どうし  
ても北海道に旅行に行きたくて、節約して貯めた四万円。旅行には  
また行けばいい。またお金を貯めればいい。それよりも大切なもの  
を買った。こづかい無くなったけど、それでいい。これでいい。

「ちよつとなって、四万って学生にとつたら相当だぞ」

「そうだな」

「まあ、いい買い物したんだよ」

本当に、いい買い物だった。

「ふーん。ところで、明日さあ、シングルの奴集めてクリスマスパ  
ーティでもないか？どうです？シングルの会代表、速水幸成さん  
？」

「あつ」



「なに？」

「いや、明日は・・・」

「なんか予定あんの？」

「ちよつとな」

正月は予定は無いのだが、明日は、実は予定があった。

「怪しいな。さすがにクリスマスに予定は怪しい。やっぱり付き合ってたんじゃないんだろうな、神崎と」

「付き合ってたないって」

「本当かよ」

「本当ですって」

今までの俺なら間違いなく出来なかったこと。変わったからこそ出来ること。どうなるかはわからない。それでも、やる価値は、ある。

「んじゃ皆で楽しくやるわ」

「波多野は彼女とデートだろ、どーせ」

「あいつ嫌いだ。彼女彼女ってうるさい」

それからしばらく他愛の無い話が続いた。波多野の彼女が浮気をしているらしいこと、サッカー部の話、テストの結果。本当に、他愛のない話だった。

楽しい時とは早く過ぎて行く。駅につくと、優一は電車に乗るためにここでバイバイだ。

「じゃあな幸成。また連絡するな」

駅の構内に入っっていこうとする優一に、

「優一」  
と呼び止める。

「ん？」

大きく息を吸い込む。明日の自分を想像して胸が苦しくなる。その痛みを押し殺しながら、優一に、

「明日、神崎に告るから」

恥ずかしい。それ以上に何か嬉しい。

「がんばれ」

そういつて優一は笑いながら雑踏の中に消えていった。

「がんばるよ、そりゃ」

独り言をつぶやくと、帰路へ戻る。何故か笑顔が自然と溢れてくる。いつもより歩幅が大きくなる。体が軽い。明日が待ち遠しい。こんなにも待ち望んだ明日がいままでにあっただろうか。記憶する限り、ない。

十二月二十三日。月曜日。天気、晴れ。時刻、十五時二十一分。

寒空は、澄み渡っている。

## 第一章 記憶を扱う男

十二月十四日。木曜日。天気、曇り。

世間はクリスマス一色。まだ十日先の話であるにも関わらず、イルミネーションで眩く街全体が輝いている。クリスマスムードの人々の合間を一人の男が無表情で歩いている。眩いばかりのイルミネーションには目もくれず、ただ一点を見据えながら歩いている。黒のベロアのジャケットを羽織り、その下にはこれまた黒のパーカー、首元にはチェックのマフラー、そして薄めのジーンズを履いている。肩には茶色の鞆をかけ、両手はズボンのポケットに深々と入れている。

「さむい」

男は一言つぶやくとポケットから両手を出し、はぁっと息を吐いた。それでも大して手は温まらなかつたようで、すぐにまたポケットに手を入れなおした。

「・・・」

寒さからか眉間に皺を寄せながら、男は腕時計に目をやる。時間は二十一時半分をすぎたところだ。

「ちょっと遅くなつたかな」

腕時計から視線を前方に戻すと視界に一際大きなクリスマスツリーが飛び込んできた。高さは十メートルはあるだろうか。色とりどりのイルミネーションが巻きつけられ、鈴や雪を模した綿などがクリ

スマスツリーを美しく化粧している。人々の半数はそれがそこに存在するのが当然というようにその場を通り過ぎ、残りの半数は立ち止まり、ツリーに魅了されている。男も自分の視線を奪ったクリスマスツリーに魅入られるように足を止め、相変わらず眉間には皺を刻んだままツリーを見上げた。

「クリスマスって一人身の奴にとってはただのうざったい一日だよなあ」

周囲に聞こえない程度の大きさでつぶやく。しばらくツリーの美しさを堪能すると、また男は歩みを戻した。

街中を進み、小道に入り、暫く進むと鮮やかな大通りからは打って変わって閑静な住宅街に出る。マンションや一軒家が立ち並び、それぞれの窓から漏れ出す光がそこにいくつもの人の営みが存在することを教えてくれる。その光の数だけ生命があり、想いがあり、喜びや悲しみといった様々な感情が存在すると想うと嫌気がさすのか、男は歩きながら光を睨む様に見据えている。どこかから聞こえてくる話し声や笑い声、その一つ一つが耳障りで、自分を嘲り笑っているように感じているのだろうか。

「・・・」

立ち並ぶ住宅の中の一つ、周囲の住宅と大きさの変わらない、なんの変哲もない一軒家。それがこの男の家だ。庭に入ると一匹の犬が男を出迎えた。

「ただいまドンベえ」

ドンベえと呼ばれた犬は尻尾をめいいっぱい振りながら擦り寄って

きた。頭をなでられると嬉しいのか目をつぶっている。暫く撫でた後、

「じゃあね」

と言に残し、男は玄関に向かった。

ポケットから家の鍵を取り出し、玄関の鍵を開ける。ノブを右側に回しゆっくりと扉を引く。

「ただいまあ」

玄関を閉め、鍵をかけると同時に男は家中に聞こえるように言った。返事はなく静まり返った空気と暗い廊下がこの空間には今自分のみしかないことを告げる。

男は何かつぶやこうとしたが止め、電気も点けず暗い廊下を通りリビングに入った。カーテンを閉めた部屋は男に軽い恐怖感を与えるほどの暗さを持ち、一定のリズムを崩さずに鳴り響く時計のカチツカチツという音が恐怖感をさらに煽る。電気的位置を手探りで探し、リビングの電気を点ける。灯りの点いた部屋は先ほどの恐怖感をすでに持たず、男にはやっと安堵感が訪れた。

「ああ、腹減った。晩飯どうしよう。なんか用意してくれてんのかなあ」

小奇麗にしてあるリビング。一般家庭にしては比較的大きめのテレビ、それを取り巻くように配置されたソファ。ソファの中心には小さめのテーブルがあり、その上には今日の日付の新聞が無造作に置かれている。ソファから少し離れた位置には木製のダイニングテーブル、その上には何も置かれていない。

二つのテーブルの上に目的の物がないことを確認すると、すぐ横のキッチンに移動し、大きめの冷蔵庫を開ける。冷蔵庫の中もリビングと同様に綺麗に整頓されている。ニリットルのミネラルウォーターを取り出し、それを飲みながら冷蔵庫の中、目立つ位置に置かれたコンビ二弁当を取り出す。

「今日は、から揚げ弁当か」

先ほど飲んだミネラルウォーターと弁当を持ってソファに座る。それらをテーブルの上に置くと男は鞆を下ろし、一息ついた。

男は一人の時間や空間といったものを嫌いではなかった。一人でいることは時には苦痛をもたらすこともあったが、それ以上に男に安堵を与える。他人と時間を共有することも嫌いではないのだが、それ以上に一人の時間を男は好いた。一人のときに特別に何かをするというわけではなく、そこでただ様々なことを考えるのを好んでいるのだ。特に決められた何かを考えるわけではなく、その日あったこと、その日出会った人のこと、自分の今や過去、未来。そういったことをただただ考えるのを男は好んでおり、それが日常化していた。

何気なくテレビのリモコンを手に取り、テレビを点ける。テレビからは呑気な笑い声が聞こえてくる。くだらないことを大きく笑いその光景が驚くほど滑稽で、思わず男は苦笑してしまった。最近人気のお笑い芸人が得意のギャグを披露している。

気に入らないのかチャンネルを目まぐるしく変える。どれもあまり気に入らないようで何度も何度もチャンネルを変えたのだが、最終的にはニュース番組にチャンネルは落ち着いていた。

弁当を包装しているビニールを乱暴に開けると、冷たいままの弁当を食べ始める。黙々と食べながらニュースに目をやる。ブラウン管からはどこかの国で飛行機事故があったニュースが流れている。

「死者は現在確認されているだけで八十六人。さらに増えると思われます」

神妙な面持ちで真面目そうなキャスターがそう告げた後、

「日本人の搭乗者はいないようです」

と少し表情を変え続けた。

ブラウン管の中の出来事は男にとって非現実的で、なんの感情も産まないほど、リアルではなかった。しかし、それは確実に現実であり、疑うことの出来ない事実であり、男の無表情と無感情はあまりにも無神経だった。しかし、かといって男は他人に興味がないわけでもなく、どちらかといえば他人に対する思いやりは深いほうである。単純に、リアルではないだけなのだ。道の反対側で困っている人がいれば無心で助けるであろうが、地球の反対側で人が苦しんでいるという事実が男の眼前にぶら下がっても、男の脳を刺激し心を揺らすのには無力であるのだ。それらを無理に同情したり、自分の手で困った人々を助けようなどといったことを考えることを男は必要以上に嫌った。さらに、そういったことをしようとする人々をも必要以上に嫌った。偽善者。そういった人々を、その言葉でくくり、嫌悪の情しか彼らに抱かない。それは男にとって至極当然の考え方で、他人にそれは間違っていると指摘されても何故違うのか、男には全く分からなかった。見知らぬ人間の生き死にほど興味の湧かないものは無く、それに無理やり肩入れすることにも同様に興味が無かったのだ。何故こうも無関係の人間に人は興味をもつのか。何故助けを乞われたわけでもないのに自分勝手に手を差し伸べるのか。何故それらの行為を自慢気にするのか。そして何故、それらの行為を自らのアイデンティティーとするのか。男には、全く、理解でき

なかった。したくも、なかった。

最後のから揚げを食べ終わり、ミネラルウォーターを一口飲み、食事を終わると、時刻は二十二時半に指しかかるうとしていた。

「ふう、満足」

それからしばらくニュースを見ていたが、突然テレビを切り食事の片づけをし、男はリビングの電気も消さぬまま鞆を持って二階へと向かった。

二階へと続く階段は大した段数も無いのだが暗闇のままだといつまでも、どこまで続くように感じられた。

電気も点けず一步一步確実に段を上っていく。足元にはちゃんと安定した足場があるにもかかわらず、暗闇という要素が不安感を駆り立てる。

暗闇の中階段を上るという行為は人生に似ている。男はそう思った。

自分の部屋に着くと、電気を点け、鞆を机の上に置きながらその横にあるパソコンの電源を点ける。男は自分の部屋に入ると必ずパソコンの電源を点ける。パソコンが立ち上がるまでの間、着ているベロアジャケットを脱ぎそれをベッドの端に掛けるように無造作に置き、ベッドに寝転び、目を閉じた。

男の部屋はリビング同様きちんと整理整頓され綺麗にされている。机にベッド、テレビに二人掛けのソファー、本棚と比較的シンプルな部屋になっている。本棚には小説と漫画本が並び、特に変わった本は置かれていない。



しばらくベッドの上で寝転がった後、男は立ち上がるとパソコンに向かった。既にパソコンは完全に立ち上がっており、男はメールのチェックを始めた。メールは一件もなく、それを確かめるとインターネットを始めた。

何か特別な調べものがあるわけではない。パソコンを立ち上げたついでといった感じでインターネットをしているようだ。今日のニュースから、男の趣味なのだろうかプロ野球やサッカーの速報にも目を通している。

ニュースを読み終わったと同時に、

「ただいまあ」

と女性の声が下のほうから聞こえてきた。

「おかえり」

男は少し声を張って言った。

「洗濯したいし早くお風呂はいつてねえ」

同様に張り上げた声で女がその言葉に答えた。

「あーい」

男は言いながら立ち上がると、パソコンを終了させぬまま一階へと向かった。

女が点けたのだろうか、先ほどとは異なり階段は照明によって明るく照らされている。明るく照らされた階段を鼻歌交じりで下りていく。暗い階段を上るときとは心境が異なるのか、男は少し微笑んでいるようにも見える。階段を降りきると、そつと階段の照明の電気を男は消した。

脱衣所に着くと男は相変わらず鼻歌を歌いながら、まずパーカーとその下のロンTを脱いだ。洗面台の鏡には筋肉質の引き締められた男の上半身が映っている。その姿は男がなんらかのスポーツあるいは格闘技をしていることを表していた。綺麗に割れた腹筋、筋がくつきりとわかる腕。プロテインで膨らんだ筋肉とは違い全体的に絞られており、日々の努力が垣間見える。

男は全裸になると、浴室へゆつくりと入っていった。

熱いシャワーを浴びながら何かを考えているのか、男は終始無言だった。シャワーから立ち上る湯気がまるで霧のように男の体を包んでいく。霧は足元から徐々に徐々に男の体を浸食していき、やがては男と一つになる。その光景は何処か神秘的だった。それは男の持つ雰囲気のせいなのか、それとも鍛えられた肉体のせいなのだろうか。

シャワーを浴び終わり、体に付着した雫を丁寧に拭き取ると、すぐそばの引き出しから下着を取り出し着用する。長めの髪は完全には乾かず、必要以上の水分を保っている。その水分が一粒の水滴となり、髪の毛から垂れ落ちた。それを鏡越しに見ていた男の顔は少し赤くなっている。

まだ乾いていない頭をタオルで拭きながら、また暗い階段を上る。数滴ほど階段に雫が落ちたが、特に気にもせず男は階段を上り、また自室へと戻っていった。

頭にタオルをかぶったまま、本棚にあった一つの小説を手取る。読んでいた最中だったのか小説の三分の二あたりのしおりが挟まったページを開き、読み始めた。

時計の針が十二を回って二十分ほど経ったころ、男は丁寧にしおりを挟み、それを本棚のもとあつた位置に戻した。部屋の電気を切り、机に座る。電子メールのフォルダをダブルクリックすると男の表情が陰しくなった。帰宅中の時と同様に眉間に皺を寄せて、画面を直視している。

新着メッセージ一件。

クリックするとメールのタイトルが画面に現れた。

画面には「Re:記憶屋からのお知らせ」と出ている。

## 第二章 速水幸成

十二月九日。月曜日。時刻、七時三分。

鳴り響く目覚まし。耳を劈く音が不快感を与える。体がだるい。それでも起きなければいけない。遅刻してしまう。

五月蠅い目覚ましを止め、ベッドから降りる。寒い。寝ぼけ眼のままカーテンを開けると、刺すような朝日がうすく開けた瞳を襲う。思わず目を閉じる。

天気、晴れ。

今日も退屈な一日が始まる。

「寒い」

文句を言いながら制服に着替える。ウチの高校のブレザーは都内でカッコいいと有名だ。だが俺はこの制服が嫌いだった。ブレザーってネクタイ結ぶのが面倒だし。さて一階に下りるか。おっと、鞆を忘れずに。

寝癖でくしゃくしゃの頭のまま一階へ下りる。リビングには誰もいない。二人とも既に仕事に行ったようだ。

冷蔵庫から牛乳を取り出す。朝はやっぱ牛乳だ。

テーブルの上に置かれた菓子パンを頬張りながらテレビを点ける。ブラウン管にはメジャーリーグの試合結果が映っている。どうやら

日本人選手が大活躍したらしい。解説者が嬉しそうに日本人選手の活躍を讃えている。

菓子パンを食べ終わり牛乳を飲み終わると、ニュースでは何処かの国の暴動を伝え始めた。さして興味もなくテレビを切ると、一つ背伸びを試みる。背中のほうから骨が鈍く鳴る音が聞こえた。

欠伸をしながら洗面所へ行く。顔を洗い丁寧に歯を磨く。それにしても酷い寝癖だ。あっちこっちに髪がはね放題だ。まさにこれ、やりたい放題。セットするのめんどくさそうだ。それでもセットしなきゃ恥ずかしくて外に出られたもんじゃない。

まず髪を濡らす。濡らしすぎってぐらいがちょうどいい。次にタオルで適当に水分を取る。ある程度乾いたらドライヤーをかける。長めの髪は乾きづらい。それでも短髪にはしない。長髪は俺のトレードマークだから。

髪を乾かすと仕上げはワックス。マツタイプでツヤの出ないように。髪を軽く後方へ流すようにセットする。・・・よし、完成。

準備が出来るともう一度テレビを観にリビングへ。テレビではちょうど朝の占いが流れている。

「うわっ、今日十二位じゃん。っていうか一位のとき一度もないしテレビを消し、時計に目をやると時刻は七時四十一分。そろそろ家を出よう。いつもより少し早いけれど。」

玄関に向かうと靴箱の上に置かれた鍵を手に取り、家をでる。きちんと鍵をかけると学校へと向かう。

今日も天気はいい。

学校は歩いて十分くらいのところにある。歩くのは嫌いじゃないし、自転車はあえて乗らない。

冷たい風が頬を撫でる。痛いくらいに。澄んだ空から降り注ぐ暖かい光と冷たい風が体内に入ると、それが生を実感させてくれる。冬は嫌いじゃない。かじかむ手も痛い耳も、嫌いじゃない。春の暖かい風も、夏のうだるような暑さも、秋の寂しさも嫌いじゃない。ただ、雨は嫌いだ。降り注ぐ雨は生と死を同時に感じさせる。表と裏は最も遠い存在でありながら、それでいて一番近い存在だ。正反對の位置にあるはずのものが同時に存在するのは、耐え難いほどの苦しみだ。だから、雨は、嫌いだ。

見慣れた街並み。何度も通った道。普段通りの雰囲気。変わらぬ毎日。それらが永遠に変わらないように感じる。

十分ほど歩くと高校が見えてくる。見知らぬ女の子が自転車ですぐそばを通り過ぎる。風を切るように。急がなくてもまだホームルームは始まらないよ。

校内に足を踏み入れると同時に強い風が吹く。春の訪れはまだ早いだろ。

いつもの下駄箱からいつもの上履きを取り出し、履く。いつもの階段を上り、いつもの廊下を歩く。いつもの教室が見えてくる。いつもの教室にいつものように入る。

「おはよう」

誰に言うわけでもなく挨拶をする。長年の癖。それに答える声。

「おはよう」

「おっす神崎」

喋りたいのにそれ以上は何も言わず自分の席につく。なんか気の利いたこと言えよ俺。駄目なやつ。

「おいつす幸成」

教室に入ってくると同時に声をかけて来たのは藤原茂久。小学校、中学校と一緒に幼馴染のようなものだ。頭は悪いがサッカーはやたら上手い。

「おう」

「テスト勉強してるか？」

「当然」

「数学教えてくれ。マジやばい。絶対赤点」

「明後日までまだ時間はある。頑張れ」

「仕方ない。最後の手段だな」

真剣な表情の茂久。どうせ下らないことを考えているに決まってる。

「どうすんだよ？」

「まず、ちっちゃい紙をだな・・・」

「知ってるか？カンニングっていうんだぜ、それ」

「あら、知らなかったわ」

笑いながら茂久は真ん中の一番後ろの席に座った。神崎と何か喋っている。気になったがそのまま顔を伏せた。寝たふり。これしかない。

遠くの笑い声。近くの話し声。廊下を走る音。目を閉じると必要以上  
に神経が研ぎ澄まされる。自分の体が自分のものではなくなり、  
宙に浮くとそのまま徐々に空気に溶けていく。その感覚は心地よく、  
嫌いじゃない。

チャイムの音で元の世界に戻る。黒板の上に掛けられた時計に目を  
やると時刻は八時十分を過ぎていた。周りを見渡すと教室は生徒で  
溢れている。すでにほとんどの生徒が登校を済ませたようだ。

「はい、席について」

担任の中杉の声が教室に響く。がたがたと教室が騒がしい。

生徒全員が着席するとホームルームが始まった。

どうでもいい話。興味もないので外に目をやる。俺の席は窓際にあ  
り、外の景色がよく見える。街を一望できるので結構気に入ってい  
る。変わりばえの無い街もここからだと思つて別物に見える。建物の  
数以上の人々がこの街に息づいていると思つて変に感動する。ここ  
から見える景色は、この星のごく一部なんだと思つて自分の悩みや  
存在がやけにちつぱけに思えて、馬鹿らしくなる。世界は大きく、  
俺は小さい。淀みなく流れる日々がどうでもいいものに感じられ、  
生そのものですら価値を無くす。

ホームルームの終わりを告げるチャイムの音で我に返る。中杉の姿  
はもうない。

「幸成、テスト終わつたらカラオケでも行こうぜ」  
茂久が話しかけてきた。



「誰と？」

「聞きたい？」

「いや、どうせいつものメンバーだろ。聞くだけ時間の無駄」

俺、藤原茂久、波多野幸助、古谷優一。いつもつるんでるメンバー。どうせこの四人だろ。聞く必要もない。

「それが違うんだな、これが」

にたにたしながら茂久が言った。

「じゃあ誰だよ」

「いつものメンバー」

「やっぱりな」

「プラスアルファ」

「はあ？」

心当たりがない。他に一緒に遊ぶような奴いたかな。

「女の子もきまつせ旦那」

だれが旦那だ。

「誰？」

「長谷川さんと山本さんと尾上さん。それに神崎さん。どうです旦那。綺麗どころを取り揃えてみました」

長谷川と尾上つてのは誰だか知らない。たぶん違うクラスの奴だろう。以前茂久が騒いでいた女の子ではないだろうか。聞き覚えのある名前だし。

「なんで？」

「なんでって、嫌なのか？」

「別に嫌じゃないけど」

嫌なはずがなかった。神崎が来るなら足が折れても這って行くさ。

「優一が昨日神崎さんにメールしたらいいのよ。皆でカラオケ行こうって。んで、こっち四人だし三人女の子誘ってみてって言うたらいい」

ナイス優一。そういえば優一と神崎は中学が一緒なんだよな。仲良さそうだし、うらやましい。

「まあ予定もないし別にいいよ。にしてもカラオケ久しぶりだな。最近ゲーセンばっかだったし」

嬉しさを押し殺す。にやけない様に、普段通りに振舞う。

「たまにはカラオケもいいんじゃない？」

「さっき神崎と話してたのその話かよ」

「おう。テスト早く終わんないかなあ」

「ちゃんと勉強しろよ。赤点取るなよ」

「うっさい。俺には秘密兵器が」

「だからカンニングだってそれ」

授業が始まると教室には教師の声のみがこだまする。普段は割りと真面目に授業を聞いている。しかし、今日は無理だ。カラオケのことで頭がいっぱい。茂久じゃないけど早くテスト終わらないかな。

四時間目の授業が終わると俺たちは校庭に集まる。昼休みは校庭で

昼飯を食べる。お決まりのパターン。

他の奴らは弁当だが俺はいつも購買のパンだ。

コロッケパンを食べていた時、ふと上を見上げると校舎の教室の窓から神埼たちが顔を出しているのが目に入った。こっちを見ているように見えて慌てて目をそらす。

「外で飯食うの寒いな」

「子どもは風の子だよキミ」

「毛生えてるから大人だ」

茂久と波多野の漫才のような会話。聞きなれたなこういう会話。

「幸成、カラオケ来るんだろ？」

優一が玉子焼きを食べながら言った。

「ああ、そのつもりだけど。なんで女誘ったの？」

「あっちから誘ってきたんだぜ。皆でカラオケ行こうって」

話を詳しく聞いてみると、茂久のことを尾上つて子が気に入っていて、上手くひつつけようということらしい。俺たちは当て馬かよ。

「尾上さんより長谷川さんのが好みなんだけど、まあ可愛かったら誰でもいいや。女は顔。あと胸だね」

「最低だなお前は。そんなだから付き合ってもすぐ別れるんだよ。まともな恋愛したら？」

「顔と胸で選んで何が悪い。大体お前は彼女いるからそんな余裕ぶったこと言えるんだよ。さっそと別れちまえ」

二人の会話を聞きながら俺と優一は笑っていた。

全員が食べ終わると恒例のバスケをする。波多野はバスケ部だから上手くて当然なのだが、俺も優一も運動には自信があつて割りとバスケは得意だ。茂久はサッカーは上手いのだがバスケはいまいち。

じゃんけんでチームを決める。俺と優一、波多野と茂久。負けたほうにジュースを奢る。寒さで冷たく硬くなった体が、動いた量に伴い徐々に暖かくほぐされていく。真夏の暑さの中で体を動かすのよりも冬の寒さの中で体を動かすほうが気持ちがいい。

「ヘイ」

優一が手を上げる。波多野をドリブルでかわし、茂久を十分にひきつけた後フリーの優一にパスを出す。そのパスを丁寧処理すると優一の手から放たれたボールは一度バスケットボードに当たった後、ゴールネットに吸い込まれていった。

「よっしゃ追いついた」

スコアは四対四。五点先取なのでお互いにマッチポイントだ。

「抜かれてんじゃねえよバスケ部」

「幸成上手いんだもん。お前バスケ部入れよ」

「抜かれてんじゃねえよバスケ部」

「何回も同じこと言っな」

いつでも何やってても五月蠅い奴らだ。

「ナイスパス」

幸成が肩に触れながら言った。

そこからしばらくお互い点を決められぬまま時間は過ぎていった。時計に目をやるとおそらく最後のプレイになるだろうことが分かった。

肩で息をする。息が荒い。頬が熱い。目の前の相手に意識を集中する。波多野のディフェンスがいつもより下がり気味に見えた。

「いいのか？そんなに下がってて」

ドリブルをしながら波多野に話しかける。同時にボールを両手で優しく包む。視線を波多野からゴールに向ける。意識も、ゴールへとひざを軽く曲げボールを高く掲げる。コートを両足でしっかりと蹴る。指先からボールが放たれる。高く高く弧を描く。波多野のブロックも届かぬ高さでボールはリングへ向かう。四人ともボールの行方に息を呑む。一度、二度、リングにボールがぶつかった後、ボールはリングを潜り抜けコートで弾んだ。

「ナイッシュー」

教室の窓から神崎の声が聞こえた。

### 第三章 神埼美紀

十二月九日。月曜日。時刻七時五十分ちょうど。

今日もいい天気。

いつもの時刻に教室につく。この時間にはまだほとんどの生徒が登校していない。ホームルームまで二十分もあるのだから当然といえば当然なのかもしれない。教室にはあまり話したことのない男子が三人、挨拶程度の仲の女子が二人だけだ。

特にすることもなく携帯に目をやる。昨日の夜に来た優一からのメールを見る。

『OK！んじゃ茂久に話しておくから』

『茂久と尾上のこともいいけど少しは自分のことも考えたら？』

『幸成のことだよ。ちゃんと幸成も誘っておくから安心しろよ』

テストが終わればカラオケが待っている。加奈と藤原くん、うまくいけばいいんだけどなあ。

少しすると山本恵美と尾上加奈が教室に入ってきた。

「おっはよう美紀」

「グッモーニン美紀」

相変わらず陽気な二人だ。この二人とは高校からの付き合いで、別

のクラスの幼馴染の長谷川愛を含めた四人でいつもいる。ちなみに加奈も別のクラスだ。恵美も加奈も成績と運動は平均的。明朗快活。恵美は身長は151センチほどでとても可愛らしい。一方の加奈は身長167センチと女性にしては大柄で、整った顔立ちも相まってモデルのような印象を受ける。

「やつほー。今日は早いね二人とも」

私の言葉に恵美が、

「加奈、今日は朝からめっちゃめっちゃテンション高いの。うざいくらい」

「だあって、テンションも上がるよ。カラオケすっごい楽しみなんだもん」

加奈は本当に嬉しそうだ。

三人でカラオケで何を歌うかという話で盛り上がっていると、聞きなれた声が教室の入り口から聞こえてきた。

「おはよう」

彼だ。彼の背は身長160センチの私よりも顔一つ分ほど高い。すらつとした体型と整いすぎているとまで思える顔は、全ての女性の目を奪うのではないかとまで思わせる。おまけに頭もよくて運動も出来る。完璧って言葉は彼にこそ似合う。

「おはよう速水くん」

思わず声をかける。出来るだけの笑顔で。

「おつす神崎」

そっけない返事を返すと彼はそのまま窓際の席へと向かった。今日はこれでいい。一日に一回、挨拶を交わすだけでいい。それだけで、今日一日を笑顔で過ごせる。

すぐ横で話をしているはずの二人の声はやけに遠くに感じる。視線は完全に彼に奪われたまま。もっと近づきたくて、もっと知りたくて、それなのに出来なくて、させてもらえなくて。歯痒い。心をえぐられるほどに愛しい人が目の前にいるのに、手を伸ばせば触れられるほどの距離にいるのに、この手は彼に手を伸ばせないまま。

「ねえ美紀、あの歌なんていうんだっけ？」

加奈の声に気づくと

「あの歌って？」

と呆けたまま返す。

「ほら、車のCMのやつ」

「ごめん、わかんない」

真剣に思い出そうとすればもしかしたら思い出せたかも知れない。しかし、それを奪われた視線が許さなかった。今、私を支配しているのは私ではなく、彼。彼の存在そのもの。本当に、あなたが愛しい。

登校してきた藤原くんが彼に話しかけている。藤原くんが馬鹿なことでも言ったのだらう、彼は綺麗な顔を崩して笑っている。



声が好き。笑顔が好き。困った顔も、悲しそうな顔も、真剣な顔も、好き。

「よお」

彼と話を終えた藤原くんが私たちに話しかけてきた。

「おはよう藤原くん」

元気な声で加奈が答えた。その後について、

「おはよう」

恵美と同時に答えた。

「神崎さん、優一から話聞いたけど、カラオケって結局誰が来るの？」

どうやら優一は詳しく話をしていないようだ。藤原くんの問いに答えようとすると、

「私たち三人と愛の四人」

一歩早く加奈が満面の笑みで答えた。

「可愛い子ばかりじゃん。おいちゃん興奮しちゃうわ」

少し下品な笑いとともに藤原くんが言った。

ホームルームが始まると、もうすぐテストが始まるのでしっかり勉強

強するように、と担任の中杉が周囲を見渡しながら喋り始めた。言われなくても頑張りますよ、先生。

ふと視線を中杉先生から窓際に向けると、彼は外を向いていた。何を考えているのだろう。机にひじを立て、あごを手に乗せたまま外を見続けている。顔は当然こちらに向いていないので表情は分からない。何を考えているのだろう。

私と彼の関係は炎と酸素に似ている。私が炎なら彼は酸素だ。私が熱く燃え上がるためには彼という存在が必要不可欠で、彼なくして私は生きること出来ない。それは自然の摂理であって変えようのないもので、変えるつもりもない。彼がいるから私は燃えることが出来る。出来るなら彼にとって私が酸素でありたい。

ホームルームが終わると、加奈と二人で昨夜のドラマの話始めた。横目で彼の姿を追う。藤原さんと話をしている。

「ドラマみたいな恋したいなあ」

眉を八の字にして加奈が言った。

「藤原くんとしたらいいじゃん」

周りに聞こえぬような声で言う。

「真剣に頑張ります」

力強い言葉に聞こえた。

昼休みになるとこの教室に集まり四人で昼食を食べる。四人ともお弁当だ。教室は昼休みということもあり騒がしい。そんな中、校庭から声が聞こえてきた。いつもの声だ。窓から顔を出すと四人の男の子が寒空の下、昼食を食べている。寒くないのかな。

「まあた速水くんですかあ？」

にたにたしながら私のすぐ横から外に顔を出したのは長谷川愛だ。

「まあた速水くんですよお」

私もにたにたしながら答えた。

食事の手を休めしばらく眺めていると彼がこっちを向いた。こちらに気づくと同時に、彼はすぐに視線をそらした。

「速水くんのどこが好きなの？やっぱ顔？」

後ろから加奈の声がした。

「優しいところ」

私は即答した。

三人は、ほとんど彼と関わったことがなく、私の言葉を理解できないという顔をしている。かくいう私もきちんと彼と話をしたことはない。

一番好きのところは優しいところ。嘘じゃなかった。

高校に入学してすぐに彼に目を奪われた。しかし、それはあくまでも容姿の話で恋心は全く抱かなかった。女の子とはほとんど会話をしようとしないう、なんだか格好をつけているキザな奴。それが彼に対する印象。それはしばらく変わらなかった。確にかっこいい。でも、それだけ。

その感情が恋に変わったのは文化祭のときだった。

文化祭で私たちのクラスはたこ焼きの屋台を出すことになった。準備はちやくちやくと進んでいき、明日が文化祭というその日に事件は起こった。クラスみんなで頑張って作った看板がぐしゃぐしゃに壊されていたのだ。犯人は結局分からずじまい。時間もなく、看板はなしで文化祭を迎えることにクラス全員で決めた、その日の放課後、陸上部の部活が終わり、文化祭の道具などが置かれていた生徒会室の前をたまたま通りかかったとき、ふと人の気配を感じて中をそっと覗いてみた。そこには黙々と何らかのことに取り組んでいる彼の姿があった。たった一人で一心不乱に。何をしているのかそのときは分からなかった。声をかけようか迷ったが、一生懸命なところを邪魔しても悪いなと思い、話しかけずに私は帰宅することにした。

次の日、文化祭当日、驚くことがおきた。朝早めに学校へついたら私は教室にある看板に目を疑った。壊されたはずの看板。それが目の前にあるのだ。その瞬間昨日の彼の姿が脳裏に浮かんだ。あれは看板を作り直していたのだ。後から登校してきた生徒が大騒ぎをしたのは言うまでもない。

「誰が作り直したんだ？」

クラスは騒がしかった。中杉先生がホームルームでみんなに聞いて

も誰も自分だと答えない。彼はというと・・・いつものように外を眺めていた。

彼がどうして黙っているのかは分からなかったが、彼の考えを尊重して私も事実を伏せることにした。いつか聞いてみようと思う。何故隠しているのか。

それから、私の彼に対する感情は大きく変わった。私の中でぎざで嫌な奴というイメージは全くなり、優しい人というイメージに変わった。自分のやったことを自慢もせず隠しているというところगतまらなくいい。こういう人だったんだ、彼は。そう思うとただのクラスメイトから気がつけば憧れの存在になり、さらに日が経つと完全にそれは恋へと姿を変えていた。そのときから、彼のことガ、愛しくてたまらない。心臓の鼓動が恋を表しているなら、爆発しそうなほどのこの鼓動が彼に対する気持ちの大きさを示している。

「優しいところって、あんたあんま話したことないじゃん」

事情を知らないのだからこの恵美の言葉も当然ではある。

「優しいところが、好き」

それだけ言うとまた視線を外に向ける。四人はバスケットに夢中だ。どうやら彼と優一が同じチームのようだ。頑張れ優一。頑張れ、速水くん。

四人で昼食を食べながらいろいろな話をする。合間合間に彼に視線を移す。お弁当を食べ終わると、四人で窓から顔を出しバスケットを観戦しながら話を続けた。

彼らは熱中しているようで、私たちの視線になんて気づいてもいないようだった。彼のパスが優一に渡し、優一がそのままシュート。ナイスパス。あと、ナイスシュート優一。

「いつもバスケしてるよね、この四人」

「スポーツ好きなんじゃない？」

「あんた藤原くんしか見てないでしょ」

「ばれた？」

私たちの下らない会話をよそに緊迫したゲームが続く。もうすぐ昼休みも終わる。どっちが勝つんだろうと考えながら見ていると、彼がボールを持った。

ほんの少し、あるかないかの時間をおいた後、彼の手からボールが飛んだ。ゴールに届くまでがとても、とても長く感じられる。リングに当たって、ボールはリングの中へ。

「ナイツシュー」

私は、思わず、声を上げる。

彼が振り向く。

彼の瞳に映る私は、今、どんな顔をしているのだろう。

## 第四章 足の重い帰宅

十二月九日。月曜日。天気、晴れ。時刻十六時ちょうど。

一日の終わりを告げるチャイム。

ざわめく教室。こつた返す廊下。

軽く伸びをする。下らない一日が今日も終わった。

「帰ろうぜ幸成」

声をかけてきたのは波多野。

「おう。今日も美里ちゃんかい？」

「悪いかよ」

「悪くはない。ただ毎日毎日よくやるなあって思っ

「案外悪いもんじゃないぜ。このときのために今日一日耐えたって  
思えるぐらいだもん。幸成も恋しろよ。速攻でからかうけど」

「からかうのかよ。恋ねえ。まあいつかはするんじゃない？」

俺は部活には入っていないためすぐに帰宅をする。優一と茂久は部活。波多野は学校が終わると一駅先の別の高校に向かう。彼女を迎えに行くためだ。よくやるよ、毎日毎日。疲れないのかな。暇だから駅まではいつもついていくけど。

「帰るのか？」

することも無いので帰るしかないと知っているくせに、茂久が言う。

「帰るよ、やることないもん」

「お前はどうせ美里ちゃんだろ。お前に聞いたんじゃないかって幸成に聞いたんだよ。勘違いするな、このデブ」

「デブって言うな」

「うっさいデブ」

「効かん」

「黙れデブゴン」

「おい、デブゴンはやめてくれ」

こいつらの会話はいつ聞いても漫才みたいだ。

「デブゴンはきついんだな。チェックしとくよ」

「燃えよデブゴン」

「おい、まじで止めてくれ」

馬鹿らしい会話を終えると、茂久に別れを告げ波多野と二人で帰宅



をすることにした。

教室を出ようとしたとき、いつものように、

「速水くん、ばいばい」

と神崎の声がした。

「じゃあな」

我ながらそっけない返事だ。情けない。

「あれ？俺には？」

「波多野くんも、ばいばい」

「俺はついだよ。やっぱりデブゴンだからかな・・・」

「いつまでも気にするなよ、ゴン」

肩を叩きながら言った俺に、

「ゴンって言うならいっそもうデブも付けてくれ」

と苦笑いの波多野。

神崎は、笑っている。

神崎は陸上部で短距離の選手。優一の話だと結構早いらしい。そういえば一年生ながら都の大会で準優勝したという話を聞いたことがある。これから部活なのだろう。毎日お疲れ様です、ホント。

もういちど神崎と別れを告げると教室を波多野と二人で出る。

階段を下り下駄箱から靴を出し、履いていた上靴を下駄箱に入れ、靴を履き校舎を出る。二年前に新築された校舎は二年経っても真新しい様相を保っている。

校舎から出ると冷たい外気が頬を撫でる。季節は冬。寒いのは当然だ。両手をポケットに押し込むと学校を後にした。

波多野もポケットに手を入れながら、

「うう寒い」

と言。

「お前でも寒いんだな」

それに突っ込む俺。

「脂肪があっても寒いものは寒い」

「お前と茂久の会話のが寒いよ」

「いつも笑ってくれてるじゃん」

波多野はかなり大柄だ。身長は俺と同じくらい。百八十センチ程度だろう。ただ横がかなり広い。何を食べたらこんなに太れるのだろう。身体測定のときに知ったのだが、体重は百キロをほんの少し超えている。気は優しいしお調子者で人気者。茂久とはいいコンビ。こういう性格なら多少太っていても、それも愛嬌になるのだろう。俺たち四人の中で唯一の彼女もち。おまけに彼女は結構可愛いということで、茂久は多少妬んでいる。芸人とか向いていそうなキャラ

クターだ。

「お前カラオケ本当に来るの？」

「なんでだよ」

「彼女いんじゃない。怒られないわけ？」

「怒られるよそりゃ。けどたまには別の子とも遊びたいのよ。たまにはね。浮気するわけじゃないしいいじゃん。黙っとけばばれないし。ばれたらばれたで皆のせいにするよ。人数合わせに無理やり連れて行かれたってね」

「てめえ」

茂久や波多野や優一の性格が羨ましい。誰とでも話せる性格。俺にはないものを持っている。俺にはない大きなもの。

波多野ののろけ話に付き合っていると、気がつく。駅についていた。帰宅する学生や会社員でごった返している。学校に行くのに一番近い道は駅なんて通らない。だから朝は駅前を通らずに登校するのだから、おそらく朝もこんな風に人が多いのだろう。電車は満員ではないだろうか。それが嫌で歩いて通える高校を選んだわけだが。

今通っている高校に進学することを決めたとき、周りからは猛反対をされた。もつと上の高校に行けるんだからそっちを選べ。中学の先生も親も皆が口をそろえて同じことを言った。人ごみの嫌いな俺は聞く耳を持たずに進学をした。後悔なんてしてない。むしろ良かったとすら思う。満員の電車に乗るなんて考えただけでぞっとする。

「あばよ」

「おう。美里ちゃんによろしく」

「よろしく言っておくわ」

そう言っただけで波多野は人ごみと同化していった。

波多野と別れるとやっと帰路につく。わざわざ毎日遠回り。その行為も日課のようになっていた。最初のころは波多野に無理やり連れて行かれていたのだが、今は進んで駅までついていっている。めんどくさいと感じていたのは最初だけで気づけばなんともなくなっていた。

「さあて帰るか」

重い足を自宅へと向けた。

すれ違う人々。見覚えのある顔、ない顔。それらを全く無視しながら歩く。まるで視界にも入っていないかのように歩く。足が重い。家に帰るのが嫌で仕方がない。それでも帰るところはあそこしかない。自分の境遇に軽く舌打ちをした。

今日一日を振り返り、やがてその行為自体の意味のなさに気づき思考を止め、ただ歩く。頭の中は限りなく真っ白で、今この瞬間に「何を考えているのか」と聞かれたら「別になんにも」としか答えようがない。見慣れた道も見慣れた街並みも、何の感動も与えてくれない。

突然の強い風。寒さで身震いする。頬が痛い。それでも心地いいと

すら思う。冬は、嫌いじゃない。

「もうすぐテストかあ」

なんでも出来た。たいていのことは人の何倍もこなせる。スポーツも勉強も。顔も。テストなんて大体トップスリーにはいつも入っているし、運動もなんでも得意だ。おそらく周囲の人もなんでも出来る奴だっと思ってに違いない。

それが、たまらなく、嫌だった。

俺は、スーパーマンじゃない。

速水幸成という人間は今ここにいる俺。しかし、速水幸成という人間はこの世界に無数に存在する。優一の中にも神崎の中にも、俺のことを知っている人の中に、身勝手に作り上げられた速水幸成がいる。それは、今すれ違った全くの赤の他人の中にすら存在するのだ。それは本当に身勝手な話で、本人とは形の異なる俺が丁寧に作り上げられて、存在する。他人の中に存在する嘘の俺は、俺に無言のプレッシャーを与える。速水幸成ならこれもあれも出来る。そう勝手に思われているのだという考えが頭の片隅にあると、それは俺を束縛する。奇妙な話。他人の中の嘘の自分が今ここに存在する自分自身を支配しているのだ。俺はその嘘の俺を壊さないように、他人の中の俺と同じスーパーマンになることを強要される。嘘の俺を壊さぬように、他人の中の俺と同じ俺を必死で演じさせられる。

本当の俺は、スーパーマンじゃない。

しばらく歩くと家についた。帰りたくもない家。それでも帰るところはここしかないのが、変えられぬ事実。

ポケットから家の鍵を取り出し玄関の鍵を開け、扉を開き家に入る。どうせ誰もいない。リビングには向かわずそのまま自室へと階段を上る。

自室に入ると特にすることもなく、鞆を机の上に置くとベッドに寝転んだ。

リビングにいるわけにもいかない。と言うよりはいたくない。なるべく顔も合わせたくなかった。それが俺の毎日だ。やってられない。

時計に目をやると、時刻は十六時四十八分。時刻を確認すると、

「晩飯まで寝よ」

そうつぶやいて目を閉じる。ゆっくりと睡魔に身を委ねる。

薄らいでいく意識の中、窓の外から子どもの無邪気な笑い声が聞こえた。

## 第五章 家庭の事情

突然の着メロ。

驚いて目を覚ます。寝ぼけ眼のままメールを開くと

『ご飯』

それだけが本分の欄に書かれている。

母親からのメールだった。毎日こうして夕食の時間になるとメールが来る。

「めしか」

ゆっくりとベッドから降りる。携帯にもう一度目をやり時刻を確認する。

十二月九日。月曜日。時刻、二十時十八分。

窓から見えるのは真っ暗な闇だけだ。おそらく雲が空には立ち込めているのだろう、月も見えない。

天気、曇り。

階段を下りる足はやけに重く、それが今の自分の心境を顕著に表している。足が重い。顔を合わせたくない。足が、重い。

リビングに入ると無言のままテーブルにつく。テーブルにはご飯と

スーパーでも買ったであろう惣菜がならんでいる。両親はすでに夕食を食べ始めていた。

「いただきます」

ぼつりと言つと、食べ始める。いつもと変わらぬ重苦しい食卓だ。

「テスト勉強はちゃんとしているの？」

母親の速水良子。旧姓、塩崎。朝から晩までスーパーでパートをしている。

「それなりに」

「それなりにつて、幸成、いつもそんな中途半端な返事しかないわね。態度も悪い。少しは親の前できちんとした態度とれないの？」

親。親とは今日の前にいる二人のことで、当然ほかの人間ではない。俺のことを気にかけてくれたことなんて、記憶する限りでは一度も無い。気にするのは勉強のことだけ。ようは頭のいい息子をもったという体裁が欲しいだけだ。父親も同様で、勉強以外のことを言われたことはあまりない。あるとすれば叱り事だけだ。これが俺の家庭。俺の家族。俺の世界。嫌気がさす。親らしいことなんて何一つしてもらったことが無い。家族での外食なんて小学校以来していないし、どこかへ遊びにいった記憶も小学校以来無い。暖かい家庭なんて知らない。心休まる場所なんて、ない。知らない。俺には、ない。

「別に普通の態度だけど」



「それが親にする態度かって言ってるのよ。あなたも何か言ってるよ」  
父親、速水亮。普通の会社員。社内ではそこその地位にはいるようだ。詳しい役職は知らない。というより興味が無い。どうでもいい。

「幸成、食わせてもらってるくせにそういう態度はないんじゃないか？親がいなかったら学校にもいけない、飯も食べられない。もっと感謝してもいいんじゃないか？態度をもっと考えなさい」

いらいらする。俺は一言でも産んでくれたと言ったのか。勝手に作っておいて偉そうに。親とは皆が皆こうなのだろうか。そうだとしたら、幸せな子どもなんてこの世には存在しない。俺がいい例だ。

「考えておくよ」

喋りたくも無い。これ以上問答したって何の実りも無い。二人の会話には耳を傾けず、淡々と箸を進める。

「いい加減にしろ」

テーブルを叩く大きな音。それ以上の声。軽い怒号。親父はそのまま続けた。

「どうしてそんな態度しかできないんだ。言うことは聞かない、親には歯向かう。少しは親の有り難味を感じたらどうだ。親をなんだと思ってるんだ。こっちはお前を育ててやってるんだぞ。ありがたく思え」

血走った目だ。そうとうに頭にきているらしい。

ただ、それ以上に俺は頭にきていた。

いままではただ言われっぱなしで、感情を表に出したことは無かった。なにを言っても無駄だと思っていたし、立場はどう考えても俺の方が弱い。いつも適当な態度で聞き流していた。まあ、それが火に油だったわけだが。でも今日は今までのようにはいかない。我慢の限界だ。耐えられない。

勢いよく立ち上がると、俺は怒りを言葉に乗せてぶちまけた。それは酷く原始的で滑稽で醜くて、ただ子どもが駄々をこねている様に見られても仕方のないものかもしれない。

「俺が一言でも産んでくれって言ったか？育ててくれって言ったか？あ？一切言ってない、一言も言ってない。誰が頼んだ？勝手に作って勝手に産んだくせに偉そうなこと言ってんじゃねえよ。親らしいことなにかしてくれたかよ。どっか連れて行ってくれたか？勉強以外で俺のこと考えてくれたことあんのかよ。どんだけ仕事が大切か知らないけどよ、お前らは俺のこと見ていてくれたことあんのかよ。ねえじゃねえか。あるんら言ってみろよ。いつ俺のこと考えてくれていたか、気にかけていたか。言ってみろよ。幸せなんてこの家で感じたことねえんだよ。それで親って言えんのかよ。子どもを不幸にしか出来なくて親って言えんのかよ。あんたらの子どもに生まれてきたのが俺にとつての一番の不幸だ。お前らなんか親だと思っただことなんて一度もねえんだよ。生まれてくるんじゃないかった。俺は……」

飛んできた母の平手。それが俺の言葉を遮った。

「……」

目からは涙の粒がいくつもこぼれている。溢れ出る感情は言葉にならず、唯、涙となって落ちていく。一つ一つ。俺は、母の涙を初めて見た。胸が苦しい。何故か分からない。締め付けられる胸が動揺を誘う。困惑。その言葉が今の俺によく似合う。

母は口元を手で押さえたまま一言も発しようとしなない。その姿はひどく弱弱しく見えた。なにも言えない。なにもわからない。しかし、唯一つ、分かったことがある。俺は自分で思っていた以上に、子どもだということだ。

その場にいるのが耐えられなくて、俺は夕食を食べ終わらずに自室へと向かった。

後ろのほうで俺を呼ぶ声がした。

振り向かずに自室へ向かう。部屋に着くと支度をして一階に下り、家を飛び出した。

行くあてなんかない。別に家出をするつもりもない。ただ、家にはいられない。俺は夜の街をただ歩くしかなかった。

「言い過ぎたかな」

後悔。いまさらしても何の意味も無い。後悔、先に立たずとはよく言ったもので、まさにその通りだ。後悔を先にすることが出来たら、人は日々笑顔でいられるだろう。それが出来ないからこそ俺は今こうして仏頂面でいるわけだが。

仲の良さそうな家族がやたらと目に付く。いつもより家族連れが多

いように感じる。おそらくは普段と家族連れの数は変わらないだろう。しかし、やたらと目に付いて、その一つ一つに苛立つ自分がいる。

俺は、懂れているんだ。幸せな家庭と言うものに。おそらく自分よりも望んでいる人間はいないと思えるほどに。もっとたくさんのことを聞いて欲しいし、氣にかけて欲しい。もっと考えて欲しい。たまには外食なんかにも行きたいし、三人で遊びにも行きたい。愛に餓えた、ただの子ども。それが俺なんだ。自分からはなんの主張もせずに愛を求める、愚かな餓鬼。苦しみと悩みで咽は乾き、心は枯れ果てる。乾いた咽は呻き声をあげる。枯れた心は自分に嘘をつく。自分を守るために。その状況を打開しようともがくが、それは他人から見れば何もしていないのと同義で、結局はただ自分の首を絞めるだけ。まるでそれはマスターベーションで、結局は悲劇の男を演じて自己陶醉しているだけののような錯覚を感じさせる。こんなにも弱いんだ。情けない。

暇をつぶすためにコンビニに入る。今日発売の週刊誌を読む。コンビニのガラス越しに手をつないだ親子が目に入った。一瞬胸が痞えたが、それを無理やりに閉じ込め漫画の世界に身をおく。

いつもなら思わず笑ってしまう漫画も今日は心を動かすには力が足りなかった。ただの線にすら見える。世界はどこまでも俺を、苦しめる。

一時間近く立ち読みをしたところで、本を読み終え移動することにした。場所は四人でいつも行くゲームセンター。駅前であり、うちの高校生の溜まり場となっている。

駅前は二十二時前にも関わらず人は絶えていない。こんな時間までなにをしているのだろうかという疑問が生じる。傍から見れば俺も同じか。

時間を潰す。やりなれたゲーム。全五面のうち三面の途中でゲームオーバー。そういえばこのシューティングゲーム、茂久がやたらと上手かったつけ。ランキングのトップにはF・Sと表示されている。茂久のイニシャルだ。ほとんどパーフェクトじゃねえか。あいつ、気持ち悪いな。

こつちをやたらと見ている女の子がいて、その視線に何となく気まずくなつてゲームセンターを後にした。

しばらくゲームをしたので結構時間は潰せた。時刻は二十三時三分。そろそろ家に帰ろう。家につくころには二人とも寝ている時間だ。今日はさすがに顔はあわせられない。

駅前はさすがに人通りが少ない。こんな時間だ、人も少なくて当然か。母の涙を思い出しながら家に帰る。あんな気持ちは、初めてだった。あまりあんな気持ちはしたくはない。それでも今回のことがすんなり終わるはずはなくて、まだまだ一悶着ある予感が胸を覆っていた。仕方ないか、さすがに。

家につくと案の定電気はすべて消え、二人はすでに寝ているようだ。静かに家の鍵を開け家の中に。そのまま自室へと向かう。今日はもう風呂にも入らずに寝よう。次に顔をあわせるのは明日の夕食のときだ。そのときまでに心の準備はしておこう。また荒れることは目に見えているのだから。

「・・・」

服も着替えぬままベッドに横たわる。今日一日は最低だ。本当に。

突然、聞きなれた音が聞こえてきた。メールの着信音。

「こんな時間に誰だよ」

メールを返すのもめんどくさく、誰からのメールかも確認せぬまま寝ることにした。一晚寝たらこの胸の痞えも少しは軽くなるだろう。そんな淡い期待を抱いて瞳を閉じる。目が覚めたら全く別の世界にいたらしいのに。そんな妄想をしながら、神経を開放していく。広がる神経。拡散した神経はやがて体を包んでいく。それは最終的には睡眠へと繋がっていくのだ。

パラパラと音が聞こえる。

天気は、俺の心にも似た、雨だ。

## 第六章 奇妙なメール

十二月十日。火曜日。時刻、十四時九分。

天気、曇り。

明日からテストが始まる。

授業はテスト前と言うこともあり復習に重点を置いている。周囲を見渡すと普段よりも真面目に授業を受けている生徒が多い。いまさら躍起になっても遅いのに。最後の悪あがきというやつ。一夜漬けをする奴も少なくはないだろう。それにしても、茂久は本当にカンニングをするつもりなのだろうか。あいつならやりかねない。前のテストは赤だらけだったが、かといって必死で勉強をしている感じでもない。本当にカンニングするのも。今日も焦っている感じでもなかったし、むしろ余裕すら感じられた。ばれたら全教科0点。そんなリスク犯すくらいなら普段から勉強しとけばいいのに。

窓の外には、どんよりと曇った嫌な空が異様なほどの存在感を示している。

目を閉じると昨日の母の涙が鮮明に浮かぶ。それは俺を絶えず苦しめ続け、心を曇らせる。再確認させられる。俺は子どもだということ。

「速水、外ばっか見てないで少しは授業聞いたらどうだ」

英語の堀山が言った。

「聞いてますよ」

適当に答えると、

「授業なんて聞いてないっすよ幸成は。いつつも外ばかり見て。授業放棄っすよ。全く駄目人間だな幸成は」

茂久がちやちやをいれてきた。

「まあ速水は授業聞いてなくても問題はないな。毎回いい成績だしな」

「そうやって甘やかすから幸成は調子のるんすよ」

茂久、頼むからもう止めてくれ。マジでだるい。

「藤原はちゃんと授業聞けよ。前回みたいな成績じゃ卒業もできないぞ」

「マジっすか？」

「通知表が真っ赤なやつは卒業できるわけないだろう」

どっと沸く教室。結果、墓穴を掘ってる。俺は昨日のことを忘れて、笑った。

「お前のせいで最悪な授業だった」

授業が終わると、ぶつくさ言いながら茂久がやってきた。俺のせい



じゃないだろ、どう考えても。

「自業自得だよ馬鹿」

大きな体で大きな声を発しながら波多野がからかった。

「うるさい。デブゴンは黙ってる」

「おい、デブゴンはやめろって言ったろ」

「黙れデブゴン」

「だから燃えよドラゴンみたいに言うなっつての」

「悪い、ブルースに失礼だよな」

「誰かわかんないよ。リーまでちゃんとええよ」

こいつらって悩みとかあるのかな。

俺は、悩みしかないな。自分の置かれた状況に改めて情けなくなる。

人の心はあまりに脆く、際立つほどに危うい。生きるという行為は裸足で割れたガラスの上を歩くことに似ている。一歩、また一歩と歩くごとに傷が増え、涙が落ちる。ガラスのないところを歩くときはどんなに幸せなことか。ただし、その幸せに人は気がつかない。悲しみのないことがどれだけ幸せで、どれだけ大切なものか。そのときには気がつかない。気がつくのはいつだってガラスに血を流すときだけだ。五体満足で生まれたことを心から幸せと感じる人間が

どれだけいるだろう。息を吸えることを幸せと思う人間がどれだけいるのだろう。そんな人間はいはしない。気がつくのは自分の脚で立つことが出来なくなってからだ。そのとき初めて人は自分の足で歩けることを幸せだと実感する。歩けるうちは歩けることを幸せなんて考えることもできない。

俺は親がいるというだけで本当は幸せを感じていなければならない人間。この世に星の数ほど存在する、親がいない人間に比べたら、俺はそれだけでどれだけ幸せを噛み締めなければならないか。それでも今はきつと感じることは出来ない。大切なものはいつだってなくしたときに分かるのだから。

一日の終わりを告げるチャイム。一斉に帰り支度をする人々。今日はさすがに部活もないので四人で帰宅することになった。いつものように神崎の別れの挨拶を受けると、俺たちは学校を後にした。

俺たちはコンビニで飲み物を買って近くの公園で話でもすることにした。

話題は当然明日のテストだ。

焦る様子の波多野。だったら帰って勉強しろって話だが、そんな甲斐性はいっつには無い。まあ波多野は成績は普通だし特に問題も無いのだが、問題は茂久だ。この余裕、絶対おかしい。怪しすぎる。明日になれば分かることだが。

「そつえばさあ」

波多野が突然話題を変えた。

「俺昨日さあ、変なメールきたんだけど」

「あなたはデブゴン過ぎます。少しはダイエットしなさい、ってか？」

「うるさいよ。そんなじゃなくて、なんか、記憶屋つてのからメールきたんだけど」

紀伊国屋なら知ってるぞ。

「それなら俺もきた」

「俺も」

どうやら三人共に同じメールがきたらしい。

「幸成は？」

「んなメールきたっけな」

そう言いながら携帯を開くと昨夜から未読のままのメールが一通あった。メールを開くと、

『タイトル 記憶屋からのお知らせ 本分 あなたの見た記憶を差し上げます。値段は記憶を見たご本人がお決め下さい。』

と表示された。

「俺も来てるわ。なにこれ？」

悪戯にしては複数にメールが来ているのが変だ。チェーンメールというわけでもなさそうで、発信元は同一のものだった。

「これなによ？」

「しらね。新手的出会い系じゃね？」

本分にはURLもついている。

「デブゴン、このURL開いてみるよ」

「やだよ。金とか要求されたらどうすんだ」

当然だな。誰がこんなわけのわからないURLを開くんだ。

「無視が一番じゃね？」

そっついながら、俺は何故だかそのメールが気になっていた。何故かはわからない。

それから話はテストの後のカラオケの話になり、奇妙なメールにはその後一切誰も触れなかった。誰一人気にも留めていない。唯一人、俺を除いて。

「あれ、なんて歌だっけ？あの車のCMの曲」

優一が言っているのは最近流行っているらしい、インディーズバンドの曲だ。インディーズながら着メロダウンロードランキングで一位の曲。切ない恋愛を歌った曲で若い世代に爆発的な人気を博して

いる。

「なんて曲だっけ？あれいい曲だよな。でもキーが高いし、難しいぞ」

「幸成なら歌えるんじゃない？お前歌うまいしさ。結構高い音も出せるだろ」

話半分にしか聞いていない自分がいた。本気で思い出そうとすればたぶん思い出せる。しかし、今は奇妙なメールが、俺の頭の大多数をしめている。何故か俺は、あの下らない悪戯メールに心惹かれていた。

それからの会話もあまり耳には入らず、ある言葉が俺を覆っていた。

『あなたの見たい記憶を差し上げます。値段は記憶を見たご本人がお決め下さい。』

日が完全に落ちると、俺たちは解散することにした。あたりは深い闇に覆われ、その深さに不安すら感じる程だった。

公園からしばらく歩き、自宅につき、家に入り、リビングには入らずに自室に戻る。鞆を床に放り投げベッドに横たわる。しばらく横になっていると、着メロの音と共にメールがきた。

波多野からだ。

『なにかあったのか？なんか元気ないみたいだったけど』

波多野は人の感情を察知するのに長けている。嫌なことがあり、気持ち落ちている日はこうしてメールが来る。どんなときも、いたって普通のふりをしている俺にとって、最初のうちは驚かされたものだ。どうしてこいつは必ずと言っていいほどに分かるんだろう。

『なにが？』

それだけ返す。悟られないように。

暫くすると返信がきた。

『なんにもないんならいいけど。なんかあったら俺らに相談しろよ。いつでもデブゴンと愉快的仲間たちはお前の味方だ』

少しだけ口元が緩む。気にいつてんのか、デブゴン。

『ありがとよ』

それだけ返すと波多野から返信はなくなり、メールを終えた。

「言えるわけねえじゃん。なんて言うんだよ。親に愛されてないんですが、愛されるにはどうしたらいいのでしょうか、とでも言うのか？無理だよ、柄じゃない」

視界には真っ白な天井だけが映っていた。

「・・・」

何気なく、先ほどの奇妙なメールを開く。

『あなたの見たい記憶を差し上げます。値段は記憶を見たご本人がお決め下さい。』

本分にはそう書かれている。

「俺、なんの記憶が見たいかな」

妙に気になる。理由を聞かれても答えられない。心理状態がそうさせているのかもしれない。理由は、わからない。

何気なくURLをクリックする。URLを開きますかという問いが現れ、俺は何の考えもなしに、はい、と答えた。

すると、とあるページにジャンプした。記憶屋。真っ白な背景に真っ黒な字でそう書いてある。その下には注意書きのようなものが長々と続いている。

『我々はあなたの見たい記憶を提供いたします。記憶の提供をご希望される方はお名前、ご住所、見たい記憶（他人の記憶を見たい方は、その方の詳細情報が必要）、その理由をご明記下さい。受付を確認すると後日記入されたご住所に記憶を発送致します。料金は記憶と一緒に同封された紙がございますので、そちらに書かれた口座に記憶を購入されたご本人が、その記憶に値するであろう金額をご自由に決め、お振込み下さい。送料はこちらが負担となっております。記憶を見て、気に入らない場合は口座への振込みはなさらないでも結構です。振込みがなくても後日、当方から料金の催促等は一切致しません。他人の記憶をお求めの場合、それが悪用するためはこちらが判断した場合は、記憶の提供が出来ない場合がございます。ご了承ください。』

なんだこれは。意味がわからない。記憶の提供？他人の記憶？仮にこれが冗談や悪戯ではないとして、どうやって記憶を提供するといふのだろう。この内容がすべて事実だとしても、料金はこちらが決めてもいいのだから金なんか払う馬鹿はいない。

「意味わかんねえ」

そう呟きながら、携帯を閉じる。

もし、もし本当に他人の記憶を見ることが出来るなら、両親の記憶が見たい。俺をどう思っているのか。ただの邪魔な存在と思っているのか。真実が知りたい。面と向かって聞けない。愛してくれているのか、なんて。聞けないからこそ、聞かなくても分かるなら記憶を見てみたい。それで俺の悩みや苦しみが少しでも軽くなるなら、見てみたい。

「なに考えてんだ、俺」

下らない悪戯メールについて真剣に考えるなんてどうかしてる。よほど昨夜のことがショックのようだ。いまだに動揺しているとでも言うのだろうか。

「馬鹿みたい」

そう自分を卑下すると、瞳を閉じる。

まぶたの裏には鮮明に、母の泣き顔が映っていた。



## 第七章 速水幸成 その2

十二月十四日。土曜日。時刻、十二時五十一分。

昼間なのに外は夜のように暗い。朝から雨が降り続いていた。雪に変わる様子も無い。

天気、雨。

この三日間はテストだった。明後日のテストを終えると、待望の力ラオケが待っている。

ここまでのテストは難無く出来ている。明後日は英語と古文。問題は無い。

波多野はテスト終わりに悲鳴を上げていたが、茂久は余裕しゃくしゃく。懸念していたカンニングもせず、単純に勉強をしていたらしい。

「マジ完璧。百点とっちゃうよ俺」

自信満々な茂久。結果が楽しみだ。あいつの落胆した顔が目には浮かぶ。

浮かんだ茂久の顔が徐々に歪み、それは母の顔と変わり、あの日の泣き顔へと。

あの日から親とは一言も喋っていない。沈黙の食卓は鉛のように重

苦しいもので、一秒でもその場から早く解放されたい俺は夕食をほとんど嚙まずに咽へと流し込み食事を終える。しばらくあの糞みたいな食卓が続くと思うと吐き気を催す。思い出すだけで咽の奥がすっぱくなる。嫌な酸味だ。

こんな家庭で生きていくなら、死んだほうがましだ。

死にたい。

この苦しみは、まさに生そのものだ。生きることとは苦しむことでその苦しみが終わるのは死という解放のみがもたらす。生命にただ一つ平等に与えられるもの。その崇高なものこそ死そのものであり、その崇高さには終わりという言葉がよく似合う。生まれた瞬間に決まっている、死。人生を馬拉ソンに例えると、ゴールとは死であり、人は死ぬために命のレースを必死で繰り広げる。死ぬために生きること。この矛盾に悩み苦しむことこそ生の醍醐味であり、意味である。死がゴールならば生者がなすべきこととはなんなのだろうか。俺は聖人でもなければ神でもない。真理なんてわかるはずがない。それでも俺なりの考えを述べるなら、死というゴールを迎えたときに生のプロセスを限りなく幸福だったと感じることではないだろうか。月並みな言い方だが笑って死ねたら、それは生の成就と言えるのではないだろうか。俺は今死んで生を成就することが出来たと言えるのだろうか。一番欲するものに手を伸ばせぬままで、なにが生の成就だ。

俺は、笑って死にたい。

俺は俺でよかったと、思いたい。

でも、それももう叶わない。

もしも死後の世界があるのなら、そこで幸せな家庭に生まれたい。母と父の愛を受け、それを喜びと感じ、二人にも幸せを与えたい。そうして日々を笑ってすごしたい。出来るなら生きているうちにそれを叶えたかった。

見てみぬ振りをしてきた、自分を殺すという行為。それを実行することがリアリティを帯びてきた。生きていくことが辛い。生きていくたくない。それは生活そのものが苦痛でしかないことも理由としてあるのだが、単純に、最も愛されたいと願う相手を傷つけたという思いと、母の涙がそこにはあった。俺は生きる意味を完全に失った。それは生を捨てるには十分すぎるほどで、世界を捨てるのにも十分だった。

俺は、死にたい。

生きていたくない。

俺は生きることを諦めようとする弱虫だ。かといって、命を自ら断つことも出来ない根性なしで、結局は後悔を纏って惨めに生き恥を晒す事しかできない愚か者だ。もがけばもがくほど水面は遠ざかっていく、泳げない子どもだ。こんなに情けない人間を俺は、初めて見た。

高校を卒業したら地方の大学へでも行こう。この家を出るんだ。十六年間も我慢できたのだ、あと二年間ぐらい我慢してやる。そしてこんな思いもしなくて済む。誰の涙も見なくて済む。

テスト勉強もそっこのけで机の上で寝ていた俺は、ベッドの上に無造作に置かれた携帯電話の発する音に驚く。誰からだろう。

携帯電話を手にとると画面には優一の名前。

「もしもし」

「もしもし、幸成？」

「ああ、どうした？」

「今どこにいるの？」

「家だよ。今日は一步も家から出てないよ。明日も一步も家から出る予定はねえよ。どうだ、ざまあみろ」

「なにがざまあみろだ。家にいるならさあ、今からお前の家に行ってもいいか？一緒に勉強しようぜ」

「別にいいけど」

「ならすぐ行くわ。十分くらいでそっち着くし、また連絡するから。待っててなあ」

そう言うつと優一は電話を切った。少し部屋でも掃除しておこうかと思っただ、わざわざ優一のために部屋を掃除するのも面倒で止めた。

俺は待つという行為が好きじゃない。待たせている者は時間を短く感じ、待たされる者は時間を長く感じる。その互いの時間の相違が生じることが耐えられなかった。同じ時間を共有しているはずなのに、確実に異なる時間に互いは存在する。それが耐えられない。

優一を待つ十分間は、嘘のように長く感じた。待つ間は勉強にも向かう気にはなれず、ただ呆ける以外にすることも無い。この状態も好きではなく、待つことが好きではない理由の一つになっている。

十五分くらい経っただろうか。少し遅いな、などと考えているとチャイムがなる音が遠くで聞こえた。どうやら優一が着いたようだ。

一階に急ぎ足で下りると玄関のドアを開ける。そこには優一の姿。

そのはずだった。優一の姿は無い。玄関には優一の代わりに神崎が立っている。

「へあ？」

思わず変な声が出る。動揺。意味が分からない。そこに立っているはずなのは優一のはずで、神崎では決していない。であるにも関わらずそこに立っているのは紛れも無い神崎美紀。

「こんにちわ」

傘をたたみながら神崎は言った。元気な神崎の声が余計に動揺を誘う。

「なんで？」

それしか言葉が出ない。

「なんでって言われても、優一が速水くんちで皆で一緒に勉強しようって。ちょっと早く来過ぎた？」

「早いとかじゃなくて、聞いてない」

「なにを？」

「そんな話、優一に聞いてない」

優一からは一言も聞いてない。優一だけが来るんじゃないのかよ。それよりもなによりも、何故あいつは神崎を呼んでるんだよ。

「優一から話きてないの？昨日あいつちゃんと話しておくって言ってたのに。相変わらず適当なんだから。恵美と加奈と愛も誘ったんだよ。もちろん波多野くんも藤原くんもね」

聞いてないし、おまけに決まったのは昨日の話かよ。さっきじゃん、連絡来たの。

「ところで、その優一は？」

「少し遅れるって、今さっきメールきた。寝てたんだって」

あいつ、何考えてるんだ。

「とりあえず、上がる？」

「うん。お邪魔します」

初めて見た神崎の私服は、たまらなく可愛らしかった。ファアの付いた黒のダウンジャケットに濃いめのデニム。足元のブーツは真新しいのか傷も汚れもない。

ブーツを脱ぎながら、

「買ったばかりのブーツ履いてきちゃった」

ニコッと笑いながら神崎は言った。その笑顔が好きなんだ。誰よりも優しい、その、笑顔が。

自室に行くと、神崎はきよろきよろと辺りを見回している。

「どうした？」

「いや、ここが速水くんの部屋かあって思って」

「珍しいものなんてないよ」

間違いでもなく夢でもなく神崎が俺の部屋にいる。いい匂いがする。香水かな。胸の昂揚は危険なくらいだ。

「ねえ」

「ん？」

神崎が少し険しい表情でこっちを見つめている。

「勉強の前にさあ、少しでも話さない？ほら、速水くんとちゃんと話したことってあんまりないしさ。聞きたいこともあるし」

俺も聞きたいことだらけです。

「別にいいよ」

まともに話せるだろうか。自慢ではないが女と喋るのは大の苦手だ。

「じゃあ、はい」

高く神崎は手をあげた。

「はい、神崎さん」

神崎の大きな瞳がこちらを見つめている。

「前から聞きたかったんだけど、文化祭のとき看板直したの速水くんだよね。なんで隠してるの？」

予想もしていない問いに少したじろぐ。

「俺じゃないよ」

「見たんだよ、生徒会室で看板直してる速水くん」

どうやら見られていたようだ。観念して理由を言うことにした。

「せっかく皆で頑張って作ったのに、それが壊されてて、すごい腹が立って、あの日遅くまで残って直したんだけど、なんだろう、なんて言うのかな、手柄を俺だけのものにしたくなかったって言うか、俺が一人で直したって言わなかったら主役は皆のままなわけじゃん。俺が直したって言ったら主役は俺一人になって・・・上手く言えないや、ごめん」

上手く言えないけど、そう思ったんだ。自分だけの手柄にしたくな



いつて。

「そっか。やっぱり優しいね。思ってた通り。私たちってさ、知り合ってもう半年以上経つのに、何回も挨拶もしたのに、全然お互いのこと知らないよね。好きな歌手も知らないし、好きな映画も、趣味も特技も知らない。同じ空間にずっといたのに、何にも知らないよね」

「話したことほとんどないし仕方ないんじゃない？」

「じゃあ、これからは少しずつでいいから教えてね、速水くんのこと」

俺は、神崎のことを知らない。何一つ。神崎も、俺のことを知らない。知っているか、神崎。キミの笑顔一つで俺の世界は晴れ渡ることを。知っているか、神崎。たまたま見に行った陸上の大会で、前日に足を怪我していたキミは歯を食いしばって走っていた。ゴールした後の満面の笑み。それらの姿が目には焼きついて、その日から俺はキミを目で追うようになったんだ。その日から、キミを好きになったんだ。歯を食いしばって、綺麗な顔を歪ませて走るキミは、まるで太陽のように、野に咲く花のように力強く、その強さは俺にはなくて、羨ましくて嫉ましくて、それでいて愛しくて。知らないだろう、神崎。俺は誰より、キミを好きなんだ。

それから俺たちはしばらく話をした。神崎は俺の面白くも無い話に終始笑顔で、もともと女の子に対して異常なほどに口下手な俺は、その神崎の反応にどれだけ助けられただろう。

「ねえ、速水くん」

「ん？」

今まで笑顔だった神崎が急に真剣な顔になった。

「好きな人とかいる？」

答えられないよ。その問いには。

「別に」

それだけ返す。言えるはずが無い。キミが好きだなんて。言っていないはずが無い。情けなくて愚かで、そんな俺なんかが、キミを好きだなんて。言っていないはずが無い。

静まり返る空間。耳鳴りのような音が聞こえる。

「そうなんだ。そっかそっか」

そう言うと神崎は黙った。沈黙。その沈黙を破ったのは俺でも神崎でもなく、優一と愉快的仲間達だった。

「ただいま幸成」

でかい声の波多野。

「なにがたたいまだ。おまえんちじゃねえよ。体も太けりゃ、神経まで太いなお前は、このデブゴン。玄関開いてたし勝手に上がらせてもらったぞ、幸成」

相変わらず口の悪い茂久。

「あら、邪魔だった？」

おばちゃんみたいなりアクションの山本恵美。その横で笑う尾上加奈と長谷川愛。

一番後ろで少し笑っている優一。

「遅いよ、お前ら」

にぎやかだ。さっきまでの沈黙が嘘のよう。

「っていうか、お前ら部屋と人数のバランス考えろよ。狭すぎる。こんなんじゃ勉強なんてできねえよ」

俺の言葉はもったもたはすなのに、周りは冷たい目。

「誰が勉強するって言ったよ？」

茂久はきよんとしている。

「今日は勉強休みだよ。パーティーだよ、今日はパーティー」

「はあ？なんのパーティーだよ」

「優一から聞いてないのか？優一、幸成に話してないの？」

優一はニコニコして、

「してない」

なんでしないかな。大事なところだよそこ。

「私も勉強会って優一から聞いたんだけど」

少し困り顔の神埼。

「神埼は真面目だから、テスト中に遊ぼうなんて言っても来ないだろ？だから少し嘘ついちゃいました」

呆れ顔の神埼。

「だからなんのパーティーなんだよ」

パーティーと言われても何がなんだか。わからない。

「テストの息抜きパーティー」

勉強って聞きましたけど。

「ちゃんと差し入れも買ってきましたよ、ほら」

波多野はコンビ二袋の中から大量のスナック菓子を取り出した。

「お前はこんなんばかり喰ってるからデブるんだよ。少しはダイエットしろよなデブゴン。成人病になるぞ。あつ、すでになってるか」

「なってねえよ。あと、デブゴンはやめろって言っただろ」

「燃えよデブゴン」

「だから、やめろって言うてんだろ。つかワンパターン。もっと俺を面白おかしくしろよ茂久」

俺は久しぶりに、心から笑った気がした。

俺の気持ちをみんな知らない。それでもいい。気なんか使ってくれなくていい。ただ、いつものみんながそばにいれば笑顔でいられる。

俺は久しぶりに、母の涙を忘れられた。

## 第八章 神埼美紀 その2

十二月十四日。土曜日。時刻、十三時二十九分。

天気、雨。

雪に変わったらしいのに。そしたら、今よりもっと楽しいのに。

昨日、優一からメールが来た。恵美や加奈、愛も誘って彼の家でテスト勉強をしようって。

私は当然喜んだ。行くに決まっている。速水くんに会えるし、おまけに彼の部屋にまで入れるのだ。矢が降っても必ず行きますよ。

彼の家に向かう。以前、別のクラスの子の家に遊びに行ったとき、彼の家の場所を覚えてもらったことがある。だから家の場所も知っている。子どもが遠足にでも行くかのように足取りは軽い。心が高鳴る。口元が自然とにやける。雨であるにも関わらず、下ろした新品のブーツが私がどれだけ今日、この日を嬉しく感じているかを物語っている。

「それにしても、全員遅刻するなんて時間にルーズすぎる」

駅に十三時十五分に待ち合わせとの約束も、全員が遅刻というふざけた結果。先に行っておいてと言われても、緊張する。しかし、チャンスと考えよう。二人だけで話しが出来るのだ、幸運以外のなにものでもない。

「雪に変わらないかなあ」

駅から彼の家に向かう。この道を、この景色を彼も何度も見ていると思うと少し照れる。彼の見てきた景色を自分も見ているのだという思いが、胸を高鳴らせる。これが恋なのだと、恋はこのようなもののだと自分に言い聞かせ、その状況に酔う。私は今、恋をしている。彼を思っている。

駅から離れ、小道に入る。見慣れない街並みは新鮮で、刺激的で、心が躍る。心一つで単なる道ですら、こんなにも心を動かす。鬱陶しい雨ですら大切なものに見える。すれ違う人々が皆幸せそうに見える。心一つで、世界はこんなにも変わる。

「確かこの辺だったはず」

辺りを見回し、彼の家を探す。青色の屋根、速水の表札。ここだ。閑静な雰囲気がどことなく彼を感じさせる。彼が育った家。彼の原点。

「緊張するなあ」

そう言いながら傘をたたみ、髪を整える。ほんの少しでも綺麗に見えるように。一指し指でインターホンを押そうとするが、一瞬迷う。押したら、彼が出てくる。その結果が体をこわばせる。

「よし」

深呼吸をする。ゆっくりとインターホンを押す。少しの間、何の反応もない。視線を下にやると、真っ白なタイルが少し濡れていた。

鍵が開く音、そのすぐあとにドアがゆっくりと開いた。そこには、きよとんとした彼。なんだか目を丸くしている。

「へあ？」

理解不能、といった顔で彼が言った。それに私は、

「こんにちわ」

と一言。

「なんで？」

驚いた顔も、好き。

髪は学校るときよりも少し乱れていて、寝癖が少し。真っ黒のタートルネックを濃いめのデニムが彼に合っている。彼の私服を初めて見た。喜ぶ自分を無理やり押し込み、いつもの神埼美紀を演じる。

「なんでって言われても、優一が速水くんのちで皆で一緒に勉強しようって。ちょっと早く来過ぎた？」

なるべく自然に。いつもの自分を演じる。

「早いとかじゃなくて、聞いてない」

「なにを？」

「そんな話、優一に聞いてない」



どうやら優一は彼に話を通していないらしい。彼の困り顔も納得がいく。

「優一から話きてないの？昨日あいつちゃんと話しておくって言うたのに。相変わらず適当なんだから。恵美と加奈と愛も誘ったんだよ。もちろん波多野くんも藤原くんもね」

「ところで、その優一は？」

「少し遅れるって、今さっきメールきた。寝てたんだって」

優一はこういうときに限って遅刻する。まあ、おかげで彼と二人つきりになれたわけだから、今回は感謝しておこう。優一のルーズさに。

「とりあえず、上がる？」

「うん。お邪魔します」

傘を傘立てに置き、玄関に座ってブーツを脱ぐ。

「買ったばかりのブーツ履いてきちゃった」

雨なのに馬鹿みたい。それでも、どうしても履きたかった。彼に見てもらいたかった。ブーツも、それを履く私も。

ブーツを脱ぐのを見届けると、彼は何も言わずに二階への階段を上っていった。リビングへと通じるドアは閉まっていて中のようにすは窺えない。彼について階段をあげる。三つある部屋のうちの一番奥、ドアが開けっ放しの部屋が彼の部屋のような。

初めて入る彼の部屋は驚くほど私の胸を高鳴らせる。いや、彼の部屋と彼、そして彼と二人つきりという状況がそうさせる。

辺りを見回すとどこか寂しげで殺風景で、何故か想像したものと非常に似ていた。彼の雰囲気と部屋も合っている。

「どうした？」

「いや、ここが速水くんの部屋があって思ってた」

「珍しいものなんてないよ」

間違いでも夢でもなく、私は今、彼の部屋にいる。彼と二人で。

「ねえ」

「ん？」

聞きたいことがあった。あの日、何故一人で看板を直したのか。何故、それを秘密にしているのか。今しかない、そう思った。

「勉強の前にさあ、少しだけ話さない？ ほら、速水くんとちゃんと話したことってあんまりないしさ。聞きたいこともあるし」

「別にいいよ」

彼の顔が少し困り顔に見える。

「じゃあ、はい」

高く手をあげる。会話のフリでもあるのだが、なによりも心の準備という意味が大きい。

「はい、神崎さん」

上に向けた手のひらを差し出しながら彼が言った。

「前から聞きたかったんだけど、文化祭のとき看板直したの速水くんだよね。なんで隠してるの？」

ずっと気になっていた。何故だろう。きつといい答えが返ってくる気がしていた。それは恋心がそうさせているのかもしれない。

恋心というのは非常にやっかいな代物で、醜いものも美しく見せてしまう。それは危険なことで、目の前の事物を正しく評価させない。私は、この世で最も残酷なものは、愛だと思う。愛は簡単に人を幸福の絶頂に持ち上げ、いとも簡単に奈落の底へと突き落とす。ときに他者の命を殺めることもあり、自分の命すら捨てさせることもある。愛ほど美しいものはなく、そして愛ほど、醜いものもない。美しさと醜さを兼ね備える愛は、残酷だ。だが、人はそれを理解していないながらそれに身を委ね、身を放り投げる。醜さすら美しいと思わせてしまうのだから仕方ないのかもしれない。

「俺じゃないよ」

目線を外しながら、見え見えの嘘をつく彼。

「見たんだよ、生徒会室で看板直してる速水くん」

あのときの彼はとても真剣な顔だった。目に焼きついている。昨日のこのように、鮮明に思い出すことが出来る。

「せっかく皆で頑張って作ったのに、それが壊されてて、すごい腹が立って、あの日遅くまで残って直したんだけど、なんだろう、なんて言うのかな、手柄を俺だけのものにしたくなかったって言うか、俺が一人で直したって言わなかったら主役は皆のままなわけじゃん。俺が直したって言ったなら主役は俺一人になって・・・上手く言えないや、ごめん」

彼は俯きながら、時折私に視線を移し言った。思っていた通りの答え。嬉しい。彼が私の考えていた通りの人で。

「そつか。やっぱり優しいね。思ってた通り。私たちってさ、知り合ってもう半年以上経つのに、何回も挨拶もしたのに、全然お互いのこと知らないよね。好きな歌手も知らないし、好きな映画も、趣味も特技も知らない。同じ空間にずっといたのに、何にも知らないよね」

「話したことほとんどないし仕方ないんじゃない？」

「じゃあ、これからは少しずつでいいから教えてね、速水くんのこと」

私は、彼のことを知らない。何一つ。彼も、私のことを知らない。知っていますか、速水くん。あなたの笑顔一つで私の世界は晴れ渡ることを。知っていますか、速水くん。あなたという存在がどれだけ私に影響を与えているか。あのときのあなたの姿が目には焼きついていて、いつまでも離れなくて、私はそれを心地いいとすら思っている。あなたに会えない一日はどれだけ寂しい一日だろう。それで

も、それも毎朝同じ時間に登校してくるあなたの声と笑顔で全てが、嘘のように消え失せる。知らないでしょう、速水くん。私は誰より、あなたを好きなのだということを。

それから、私たちは色々な話をした。彼は優一達のことを話すとき、本当に嬉しそうな顔をする。かれにとってどれだけ大事な存在なのかは、その表情から容易に読み取れた。彼にとって私という存在も同じようなものでありたいと願う私は、少しだけ、彼らに嫉妬してしまう。それは雨を望む草花のようで、儚く、今にも消え去りそうな願いだ。

「ねえ、速水くん」

もう一つ聞きたいことがあった。

「ん？」

窓の外で降り続ける雨にあった視線を私に戻しながらの返事。

「好きな人とかいる？」

声が震えているのが自分でもわかる。もし、答えが望むものでなかったなら、私は明日からどういう風に生きていけばいいのだろう。そんな思いが頭を巡る。

「別に」

ほんの少し。あるかないかの間。そのあとの彼の答え。嘘か真実かの判断は私にはしようがない。それでも今の私にはそれを真実とし

か受け止めようがなく、嬉しさで周囲が明るくんったように感じた。

静まり返る空間。耳鳴りのような音が聞こえる。

「そうなんだ。そっかそっか」

それだけ言うと、私は意を決する。今から彼に愛を吐き出す。心臓に閉じ込められた思いを吐き出す。その準備をするのは容易ではなく、胸が異様なまでに脈打つのを感ずる。破裂しそうな心臓は今にも口から飛び出しそうだ。

「あなたが好き」

そう言おうとした刹那、決意はいとも容易く壊される。

「ただいま幸成」

私の無理やりに振り絞った雨粒ほどの勇氣は、波多野くんの一言に簡単に掻き消されてしまった。なんて間の悪い。返して、私の小さな勇氣。

先ほどの静けさは瞬く間に無くなり、今は五月蠅いほどだ。

「あら、お邪魔だった？」

恵美が笑いながら言った。

「なによなによ、二人で向き合って座っちゃて。何話してたのよ」

愛は既に完全に野次馬と化している。

「どうだった？二人つきりは。わざと遅れてきたのナイスアシストでしょ？あんたのために皆で時間遅らせたんだから、少しは感謝してよね」

小声で加奈が耳打ちしてきた。いや、確かにナイスアシストだったけど、来るのもう少し遅くしてもらえたら幸いだったのだけれど。

「っていつか、お前ら部屋と人数のバランス考えろよ。狭すぎる。こんなんじゃ勉強なんてできねえよ」

みんなに彼が言った。確かに少し狭い。これだけの人数が勉強しようと思ったら結構なスペースがいる。なにより座るテーブルがない。これでは勉強なんて不可能なのではないだろうか。

「誰が勉強するって言ったよ？」

藤原くんはきよんとしている。

「今日は勉強休みだよ。パーティーだよ、今日はパーティー」

「はあ？なんのパーティーだよ」

「優一から聞いてないのか？優一、幸成に話してないの？」

優一はニコニコして、

「してない」

と一言。あの、優一、私も聞いてないのだけれど。

「私も勉強会って優一から聞いたんだけど」

言いながら優一に視線をやると、

「神崎は真面目だから、テスト中に遊ぼうなんて言っても来ないだろ？だから少し嘘ついちゃいました」

嘘ついちゃいました、じゃないよ。確かに普通なら絶対に遊びになんて行かない。でも今回は別。なにせ彼の部屋に入れるのだから、堅物の私でも勉強ほっぽりだして行くに決まっている。読みが甘いね、優一。

加奈は藤原くんのほうをちらちら見ている。余程嬉しいのだろう、明るいうちに加奈がいつも以上の明るさだ。かくいう私もなのだが。

波多野くんが大量のスナック菓子をコンビニ袋から取り出している。いくらなんでも買いすぎではないだろうか。スナック菓子の袋を開ける音は少し耳障りで、遠くに聞こえる雨音とどこか似ている。

今日はなんて楽しい一日なのだろう。

皆とこうして賑やかに過ごせて、おまけに彼までいる。告白できなかったのは残念だが、機会はいつでもある。

今日はなんて、素晴らしい一日なのだろう。



横目で見た彼の笑顔がいつもより、にこやかに見えた。

## 第九章 僕の見たい記憶

十二月十四日。土曜日。時刻、十九時四十分ちょうど。

変わらず、雨。

皆が帰ってから十分程度経った。嵐の後の静けさとも言うのだろうか、一人の部屋はただ、静まり返っている。

誰かと一緒にいるのは、嫌いじゃない。だが、別れた後のなんとも言えない寂しさは、好きじゃない。ほんの少し前まで確かにそこにあった温もりや息遣いが、今はない。それは耐え難いほどに寂しい。皆が去った後に呆ける自分の姿も、好きじゃない。

色々な話をした。笑って、怒って。青春というやつだ。二人っきりで何をしていたかという話題が出たときは周囲は大盛り上がりだった。別に何もしていないのだが。

人間と言うものは想像の生き物で、考える葦であるとはよく言ったものだ。想像が全てを征服していく。一度生まれた想像は容易には消えず、それがマイナスのものならば絶えず苦しめられ続ける。想像はまるで生命を持っているかのようにときに本人の意識とは関係なしに増幅し、形を変え、謀反を幾度と無く繰り返す。ありもしない空想に悩まされる。それはこの上の無いほどに滑稽で、人間の愚かさを象徴している。だが、その滑稽さも愚かさも嫌いじゃない。人間らしさという点で言えば、その二つほどそれに当たるものはないからだ。人間は滑稽で愚かで、あまりにも弱い。自分自身も、間違はなく、弱い。矛盾しているのだが、自分の弱さは、好きじゃない。

もう二人は帰っているころだろう。また、最低の食卓につく時間がくる。俺は、弱い。

ベッドに寝転がって、ふと天井を見つめっていると、小さな染みが目に付いた。小さな小さな染み。こすれば簡単に取れてしまいそうな染み。その弱弱しさが何故か自分のようだと感じ、思わず自分を嘲笑した。

そろそろメールが来るころだ。ご飯。それだけ書かれた短いメール。思いの浅さが垣間見えるメール。

携帯になる。

ほら来た。ちょうど二十時。いつも通りだ。内容は見る必要もない。リビングでは相変わらず既に食事を二人は始めている。

「いただきます」

椅子につきながら呟く。

変わらぬ食卓、雰囲気。嫌気がさす。

「今日誰かきていたの？」

こちらに視線をむけずに母が言った。

「ああ。学校の友達」

「テスト中によく遊べるのね。昼間勉強しなかった分、夜にちゃんとしなさいよ」

「ああ」

相変わらず勉強にしか感心がない。友人のことかもっと聞くことあるだろうに。俺自身には本当に興味が無い。

うちでは食事のときはテレビをつけない。そのせいで黙々と食事をするしかなく、余計に重苦しいものになる。食事中もほとんど誰も言葉を発しようとしなない。それは、家族全体の関係があまり上手くいっていないことを表していた。家族団欒。無縁の言葉だ。

無言の食事を終わると席をたち二回の自室に向かう。そのとき、

「幸成、ちょっとまちなさい」

父の声。久しぶりに聞いた気がする。

「なに？」

「なにか言うことは無いか」

意味が分からない。なんだと言うんだ。

「別にないけど」

「ごちそうさまぐらい言いなさい。母さんが用意してくれた食事なんだからそれぐらい言うのが礼儀だろう」

作ったものなんて何一つない。全て買ってきた惣菜。偉そうに。

「・・・」

なにも言えなかった。なにも言わなかった。母親なら料理ぐらい作ったらどうだ。そんな気持ちから、言葉を出さなかった。

「黙っているんじゃない。ごちそうさまくらい言え」

「うるせえんだよ」

母親の手料理と言うものを長らく食べていない。そのくせ偉そうな両親。それが腹が立ち、思わず反感の感情が言葉になり噴出す。

「なんだと」

「いつもいつも惣菜ばかりでよ、料理もまともに作らない。そのくせ偉そうにしてんじゃねえよ。買ってきたものをそのまま出してるだけじゃねえか。なにがごちそうさまだ。ふざけんなよ」

「お前のために毎日毎日仕事をしているんだろ。帰ってきてから作る時間もないから仕方なく買ってきているんだろが。それをお前は、なんだその言い方は」

「偉そうにするな。親なら親らしく・・・」

母の涙が頭をよぎる。それが言葉の続きを遮る。

それ以上何も言わずに自室へと向かう。後ろのほうから父親の怒号が聞こえるが無視。これ以上話していると、あの日の再現になって

しまう。振り向かずに自室への階段を駆け上った。

俺の態度は全て単なる天邪鬼で、理想の家族の形を追い求めれば追い求めるほど別の形を形成させていく。違う、こんなじゃない。そう思う一方で、結果はこんなにも異なったものへと進む。愛されたい。それは願いであり、哀願であり、傷であり、足枷であり、自分という存在の存在意義であり、全てだった。

日に日に高まる不安。形を成した不安はやがて確信へと変わる。自分は、愛されていない。それは俺を覆い、孤独へと追いやる。何もかも、どうでもいい。そんな感情すら生まれてくる。もう愛されたいなんて思わない。考えない。なにが親だ。親なんて、いらぬ。

涙が頬を伝う。生きる意味が無くなったことはこんなにも不幸で惨めで残酷で。まるで、どうしていいか分からなかった。

ふと数日前のメールが気になった。記憶。記憶が見たい。二人の記憶が。自分は愛されて生まれてきたのか。望まれて誕生したのか。今、本当に愛されていないのか。確かめたい。手段があるなら。

数日前のメールを開く。添付されたURLをクリックし、サイトへ移動する。すると一度見たことのある画面が現れた。

『我々はあなたの見たい記憶を提供いたします。記憶の提供をご希望される方はお名前、ご住所、見たい記憶（他人の記憶を見たい方は、その方の詳細情報が必要）、その理由をご明記下さい。受付を確認すると後日記入されたご住所に記憶を発送致します。料金は記憶と一緒に同封された紙がございますので、そちらに書かれた口座に記憶を購入されたご本人が、その記憶に値するであろう金額をご自由に決め、お振込み下さい。送料はこちらが負担となっております。』

す。記憶を見て、気に入らない場合は口座への振込みはなさらなくても結構です。振込みがなくても後日、当方から料金の催促等は一切致しません。他人の記憶をお求めの場合、それが悪用するためとこちらが判断した場合は、記憶の提供が出来ない場合がございます。ご了承ください。」

その下には、『記憶を注文する』と書かれている。クリックすると画面が変わり、『記憶の注文フォーム』と書かれたページが現れた。

「胡散臭いなあ」

お名前、生年月日、年齢、性別、住所。ありきたりな事項が並ぶ。それに一つ一つ記入していくと、見たい記憶という欄が現れた。横には注意事項。『複数の方の記憶は受け付けられません。ご了承ください。』

「・・・」

無言のまま、そこに、『母の記憶』と記入する。父でも母でもどちらでもいいのだが、何気なく母と記入した。

次の記入欄は『見たい記憶のキーワード』だ。見たい記憶のキーワード。キーワードである単語を一つだけ入力できるようだ。

「・・・」

しばらく考えた後『子ども』とそこに記入した。これで本当に記憶なんて見れるのだろうか。信憑性はまるでない。

その下に、こう書かれている。

一、記憶は映像が劣化するため一度しか見ることが出来ません。ご注意ください。

二、お一人様で一度だけの注文になります。

三、お求めの記憶と内容が異なってもクレーム等は一切受け付けません。

四、記憶をご覧になった際に生じる利害に関して、当社は一切の責任を負いません。

五、他者（ご覧になられた記憶の関係者を除く）への記憶の内容、及びそれによって生じた感情、及び当サイトに関する情報を伝えることを禁じます。これを破られた場合、当社が責任をもって記憶を消去致します。

六、記憶はお一人でご覧になって下さい。

七、記憶の発想には数日かかります。ご了承ください。

以上の事項をご了承になられた上で記憶を注文いたしますか？

はい いいえ

内容に目を通すと、はいをクリックする。

するとページがまた変わる。

『記憶のご注文を承りました』と大きく書かれたページが現れた。



これで注文が終わったようだ。

本当に記憶なんて見ることが出来るのだろうか。しばらくしたら答えはでる。どうせ下らない結果になるのだろうか。期待なんてしていない。そう思いながら、少し、いや、かなり期待している自分がいた。

外では、雨音が激しくなっていた。

## 第十章 神埼美紀 その3

十二月十六日。月曜日。時刻、十一時三十分。

天気、快晴。

耳を劈くチャイムが長かったテストの終わりを告げる。

出来は上々。

掃除の後にホームルームがあり、学校は終了。いよいよ待ちに待ったカラオケ。この日をどれだけ待ちわびただろう。そのおかげで苦痛でしかないテストを乗り越えられたのは言うまでも無い。

「美紀」

恵美だ。掃除の間、テストの出来が悪かったことで相当愚痴をこぼしていたくせに、今は白い歯を覗かせ、機嫌のよさが窺える。

「さあさあ、これから楽しみの時間ですよ。レッツ、カラオケタイム」

「先にご飯食べに行こう。私お腹空いちゃった」

「美紀は花より団子ですか」

団子より花。ご飯より彼。何より、彼。

集合場所は正門。私たちは早めに着いたようで、まだ男子メンバー

は来ていない。

「どごご飯食べに行く？」

「マックでよくない？」

女は時に、花より団子になる。普段は花にばかり憧れている振りをしているが、実際一番は団子で、その様はリアリストという言葉がよく似合う。女性はリアリスト。男性はロマンチスト。男性が女性より子どもだというのはこれが大きな要因ではないだろうか。かくいう私もリアリストなのだろう。彼のこと以外は。

「待った？ 幸成が悪さしたから先生に呼ばれてさあ。遅くなりましたあ」

いつも元気な藤原くん。そしてその愉快的仲間たち。

「なにしたの？ 速水くん」

愛の質問は最もで、優等生の彼が先生に呼ばれるのは不思議だった。

「別に悪さなんかしてねえよ。大したことじゃねえよ」

「その割には結構話長かったじゃん」

「なんでもねえって言ってんだろ」

突然の彼の怒号に辺りが凍りつく。こんな彼を見たことはなかった。彼に対して今朝からなんとなく違和感を感じていたのだが、何かあったのだろうか。

「なんだよ、なんか機嫌悪いぞ幸成。なんかあったのか？」

優一の一言。そして、ほんの少しの沈黙の後、

「別に何でもないよ。悪かったな、大声出して」

普段とは何処か違う、何処かと聞かれても答えられないのだが、違和感のある笑顔で彼は、そう呟いた。

それからの彼は普段と変わらない。それでいて、どこからか漂う違和感が私の心を包む。マクドナルドでもその違和感は続いていた。

「そういえばさあ」

藤原くんが目を輝かせている。

「前にやったやつ、面白かったよなあ」

「なに？前にやったやつって」

藤原くんと同じように目を輝かせているのは加奈。好きだからこそ瞳の輝きだろう。

「もう絶対やらねえぞ。ハンバーガー大嫌いになれるからな」

冷めたポテトを食べながら苦笑いの彼。

「なにしたの？」

「ハンバーガー百個食べようって遊び。めちゃくちゃ楽しかったよな」

「何が楽しいんだよ。あれからしばらくハンバーガー食べられなかったんだぜオレ。ハンバーガー見ただけで胸焼けしたっての」

舌を少し出しながら波多野くんが眉間に皺を寄せて言った。

「ハンバーガー百個食べようって言い出したのお前だろうが」

彼は髪をかき上げながら言った。その仕草に少し胸が高鳴る。

「ハンバーガー百個下さいって言ったら、店長出てきてさ、ハンバーガーは衛生の問題上五十個までしか出せませんって言われたのよ。そしたら幸成が、衛生上問題ないハンバーガー五十個を二つ下さいって言ってさ、んで結局ハンバーガーは百個出てきたんだけど、最初のうちは楽しく食べてたんだ。ハンバーク二つ重ねてダブルバーガーとかってやつたりしてさ。でも残り四十個くらいからは地獄だったよな。吐きそうになりながら皆で食ったつけ。昼にマック行つたのに、食べ終わったのは夕方でさ、帰るとき皆で、百個も食えるかボケ、とか愚痴垂れながら帰ったんだよなあ。マジ楽しかった。またやるうぜ。次は、チーズバーガー百個な」

皆は大笑い。衛生上問題の無いハンバーガー五十個を二つ。そういうことを言う彼がなんだか想像できなくて私は思わず吹き出してしまった。

「絶対やらねえ。金かかるわ吐きそうになるわハンバーガー嫌いになるわ、良いことなんて何一つなかったじゃねえか」

優一は笑っている。彼も、少しだけ笑っていた。

暫く話をした後、

「そろそろ行こっか」

彼が席を立ちながら言った。これからカラオケ。楽しみにしていた。かつてこんなにも待ちわびたカラオケがあっただろうか。たかがカラオケ、されどカラオケ。

駅前のカラオケは立地条件も手伝っていつも人で賑わっている。うちの高校の生徒もよく利用していて、行くと必ずと言っていいほど見知った顔に出会う。

学生証を提出すると学生割引料金で利用できる。当然フリータイム。予定では今から夜八時まで歌いまくる。時刻は十二時四十一分。七時間以上の長丁場。

八人にしては少し広いくらいの部屋。カラオケという文化は非常に珍しいらしい。他の国ではあまり見られない文化のようだ。私たちに見ればあって当然の文化で、高校生にはなくてはならない必須の文化だ。

フリードリンクなので皆がそれぞれ飲みたい飲み物をコップにつぐ。私は烏龍茶。彼は、コーヒー。砂糖もミルクも入れていない。ブラツクなんて飲めるんだ。

最初は誰もが牽制しあう。誰が一番最初に歌うか。これは肝心で、大抵盛り上げ役の人がトップバッターに選ばれる。まずはテンポのいい曲だろう。場を盛り上げる。出来そうで中々出来ない役目で、

こんなときに力を発揮するのは藤原くんだ。

「んじゃ、オレいきまーす。ゆずで、夏色」

聞きなれたメロディーが流れる。テレビでは男女が微妙な恋愛ドラマを繰り広げている。いつも思うのだが、この滑稽ともいえるドラマは必要なのだろうか。一昔前の服装で一昔前のドラマのような滑稽さ。これがいつも不思議だった。何故カラオケってこんなの流すんだろう。

以外にも藤原くんは上手で、プロ顔負けで、場を盛り上げるには十分すぎるほどだった。加奈がうつとりしているのは言うまでも無い。

「上手だね藤原くん」

笑顔の加奈。

「おう、ありがとさん。ってかさ、なんか、くんづけとか止めない？この間の幸成んちでもそうだったんだけどさ、なんか折角仲良くなったんだから、呼び捨てとか、あだ名で呼ばうよ」

そう言つて、藤原くんは手をあげた。

「オレ、茂久つて呼んで」

「じゃあ、私は加奈つて呼んで」

「恵美で」

「愛でいいかな」

「優一か、ユウかな」

「美紀って呼んで」

「幸成って皆呼ぶし、幸成で」

「んじゃオレは・・・」

みんながそれぞれに言葉を発した後、波多野くんが一言言おうとしたのだが、それを遮るように藤原くんが、

「お前はデブゴンな」

「まじやめて」

場はデブゴンコール。波多野くんは全員に悪態をついている。何気なく彼に目をやると、少しだけ笑っていた。その笑顔がどこか寂しげで、私も少しだけ寂しくなった。

次に歌うのはデブゴ・・・じゃない、波多野くんだ。ラップがメイソンの曲で、わざと声を枯らせて歌っている。曲の合間合間に藤原くんと優一のデブゴンコールが入って、波多野くんは歌いにくそうだ。

それから私たち女子メンバー四人で、昔流行った歌を歌った。彼の行動が気になって、ちらちら見てしまう。優一と何かを喋っている。内容が気になって、歌詞を間違ってしまった。

「コーヒー入れてくるわ」



彼が立ち上がる。好機とばかりに私も立ち上がって、

「私も行く」

カラオケルームを出る彼についてドリンクコーナーへ。彼は黙ったままコーヒーを入れている。やはりブラック。

私は彼に、烏龍茶を入れながら、

「砂糖も何にも入れなくて苦くない？」

と聞いた。すると彼は、

「甘いのが苦手なんだよね」

と一言。このどこかそっけない、人を寄せ付けようとしない雰囲気。神秘的で異端で、確固たる個を示しているように感じる。それにどうしようもないほどの好意を抱く私。

「なにかあった？」

彼の今日の違和感が気になっていた。孤高の雰囲気はいつものことなのだが、孤独を漂わせながらも何処か温かみのある彼の雰囲気は、今日は何故か冬の寒空のような、痛いほどの冷たさを感じさせる。それが、気になっていた。

「なにが？」

綺麗な顔を少し歪ませて、苦い顔をして彼は言った。

「なんか、いつもと違うから、速水くん」

「別に何にもないよ。心配かけるようなことはなんにもない。それより、くんづけ止めるんじゃないかなかったつけ？」

口元にほんの少し笑みを浮かべて言ったのち、湯気が立ち上る熱そうなお茶を一口すすった。

私は照れながら、

「じゃあ、今日から幸成って呼ぶね」

相変わらず口元にほんの少しだけ笑みを浮かべながら彼は黙って頷いた。

「神崎」

私の名前を呼んだ彼は何かを言おうとして、

「いや、なんでもない。そろそろ戻るか」

そう呟いた。

「幸成」

彼が何を言おうとしたのか聞きたくて彼の名前を呟く。なにか言いかけたことあるなら言っただけ。そう言おうとしたが、何故か聞いてはいけないと感じ、その言葉を心に閉まう。その言葉の代わりに、

「神崎じゃなくて美紀でしょ」

彼はその日初めて、寂しさの感じさせない笑顔で、

「わかったよ、美紀」

そう言った。

カラオケルームに戻ると、みんな歌も歌わずに話し込んでいた。私たちもその輪に入って下世話な話題に身を委ねる。雑談は下世話で下らなければ下らないほど良い。話題が話題を呼んでどんどん変わり、結局最初は何の話をしていたのか分からなくなる。それぐらいが雑談にはちょうどいい。

しばらくすると優一と彼が二人で席を立った。なにかあったのだろうかと、気になったのだが、ついていくわけにも行かず、その場で雑談を続けるしかなかった。

「ねえ美紀、さっき何話してたの？」

「なにが？」

「速水くん、じゃなかった、幸成と何話してたの？」

愛は興味心をその目に宿している。それに連なるように私の言葉をその場の全員が待っているようだ。

「別に、普通の話だよ。コーヒーマグで平気なの？とか」

「つまんないの」

愛が舌を鳴らした。

「かんざ・・・美紀って幸成のこと好きなの？」

ド直球。藤原くんの質問はあまりにもストレートすぎて思わず、

「うん、好き」

と答える。

「そうなんだ。あいつカッコイイもんなあ。女なら大抵惚れるよな。オレだって幸成にはホの字だもん。顔いい上に頭もいい、運動も出来る、おまけに性格もイイなんて何であいつに勝てるんだって話だよ」

「性格いいの？幸成って」

加奈は藤原くと少しでも多く話をしようと必死だ。それに割って入るように波多野くんが、藤原くんに、

「いいよなあ？」

と笑顔で同意を求めた。

「ああ。あいつは性格いいよ、腹立つくらい。随分前だけどき、まだオレらが幸成と仲良くなかったころ、公園であいつ一人で何かしてたんだ。近づいてみると、一生懸命土を掘ってたんだ。同じクラスだったけど喋ったことなくて、でも何してるのか気になってさ、聞いたんだ。そしたら、猫の墓作ってるって。道端で轢かれた猫の墓作ってたんだぜあいつ。馬鹿じゃねえのって言ったら、体が勝手に

に動くんだ、って。最初のころ、なんとなくすかしてるって感じがして嫌いだっただけ、それからだな、アイツと仲良くなったの。それまで、大っ嫌いだったけどな」

「あつたな、そんなこと。確かに最初のころ茂久は幸成のこと嫌ってたな」

「昔の話だよ。あいつさ、ああ見えてお節介なんだよ。他人に興味ないようで一番周り見てるのあいつだもん。優一は、誰かが元氣ないときとか、どうしたんだ？って親身になるタイプだけど、幸成はそんなとき黙ってそばにいてくれるんだよな。二人ともめっちゃめちゃイイ奴だよ。自慢の友達だ」

「オレは？」

「お前は、悪友だ。そしてデブゴンだ」

彼の意外な一面に三人は驚いているようだ。道端で轢かれた猫に対して可哀想とを感じる人間は少なくはないだろう。それでも行動に移る人間がどれだけいるのだろう。大抵の人間はその場で感情は生まれても行動には移さない。彼はきつと、全てに手を差し伸べようとするのだろう。それが他人から愚かだと蔑まされても。彼はきつと、全てを慈しもうとするのだろう。それが自分を傷つけても。

巡る思いはやがて一所に集まり、形を成す。それは誰かを思う気持ちにさせる業で、煙草の煙のようにやがては霧散していく。それでも纏わり付いたその感情は消えようとはしない。いつまでもいつまでも。それが恋だと知りながらも、あと一步が踏み出せない。踏み出す勇気がなくて。自分を傷つける覚悟がなくて。

「幸成って好きな人とかいるの？彼女はいないみたいだけど」

恵美は私の気持ちを代弁したつもりなのだろう、私に笑顔を見せながら波多野くんに聞いた。加奈に遠慮をしているのだろう、あえて波多野くんに聞いたようだ。

「あいつさあ、そういうのは全く分かんないんだよなあ。女に興味なんかないって感じじゃん？恋愛話とかも全くしないし、俺らもわかんねえや。なあ？」

「えっ、でも・・・」

藤原くんは何かを言おうとしたが、

「いや、やつばいいや」

それだけ言うとは黙った。間違いなく彼のことだし聞きたかったのだが、怖くて聞けなかった。自分にとってマイナスなことばかりがイメージされる。それが聞きたいと望む心を押さえつける。聞けない。なんだか怖くて。

「たっだいまあ」

そのとき、優一が大声で部屋に入ってきた。彼も一緒だ。

「なにしてたんだよ、男二人で」

「トイレに付き合ってもらってたんだ幸成に。一人じゃ寂しいだろう？」

「長かったし、大のほうだな」

「正解」

たくさん聞きたいことがある。たくさん知りたいことがある。あなたを知りたい。辛いことも苦しいことも楽しいことも嬉しいことも。全てを知りたい。たくさん疑問と蟠りがあるけれど、あなたと時間と空間を共有できたことはとても幸せで、それで満足してしまいそうなの自分がもどかしい。それだけで満足しては駄目なはずなのに。心が揺らぐ。このまま、今の関係を壊したくない。でも、壊したい。揺らぐ心は風で浮遊する紙飛行機のように行方を捉えきれず、私自信ですら着陸地点を定められない。

彼の歌を聴きながら、一つ一つのフレーズを心でなぞる。紙飛行機が少しずつ軌道修正されていくのを感じる。カラオケルームには窓なんてなく、外の景色は窺えない。それでも、確信に似た自信がある。

空はきつと、雲ひとつ、ない。

## 第十一章 速水幸成 その3

十二月十六日。月曜日。時刻、十二時七分。

職員室から見える空は、気分とは正反対の、晴れ。

ホームルーム後、担任の中杉に職員室に来るように言われ、状況をあまり理解できないまま、今オレは職員室の前にいる。

「失礼します」

一礼して職員室へと足を踏み入れる。

職員室では忙しそうにしている者あまりいなく、暇そうに呆けている者、新聞を読んでいる者、それぞれがそれぞれの行動をしている。聖職者としての威厳なんて感じられない。下らない。

侮蔑の目で周囲を見据えると、職員室の奥、窓際の中杉の席へと向かう。何かしらのプリントに目を通している。

「なんですか？」

一言、中杉に言葉を投げかける。

「おう、速水。ちょっと話があつてな」

「はあ。で、なんすか？」

心当たりはない。怒られるようなことをした覚えもなければ褒めら



れる覚えもない。どうせ下らない話だろう。などと考えていると、思いもよらぬ言葉が返ってきた。

「先生に何か相談することないか？」

はあ？突然何を言い出すんだこの人は。別に相談することなんてないし、仮にあったとしてもオレが他人に相談などとするようなキャラでないことは知っているだろうに。一体なんだと言うんだ？

「別に何にも無いっすけど」

あるわけが無かった。

「友人関係とか、家族のこととか、何かあるだろう？」

「いや、だから別に何にもないっすよ」

家族という言葉が引かかる。なんなんだ、一体。それからしばらく押し問答が続く。何かを探っているのは明らかだった。

「正直に先生も話すから、速水も正直に答えてくれ。最近家族のことで悩んでないか？今日な、お母さんから朝、電話がかかってきてな、速水が・・・」

「電話ってなんですか？母から電話あったんですか？」

「ああ。電話があつたことは内緒にしてくれと言われたんだがな、お母さん随分心配してるみたいだぞ」

信じられない。何を考えてるんだ。確かにあれから毎日のように言

い合いが続いて、唯でさえゴタゴタした家庭はより一層複雑に荒れている。時化のように波は高くなり、もはや息継ぎもままならないほどに荒れ狂った海は、恐怖にも似た疎外感を感じさせる。孤独。その言葉以外に最早、現状を表す言葉は無い。

「先生には関係ないことです。これは家族の問題なので」

苛立ちは臨界点にまで達していた。家庭内のいざこざ、それを外にまで持ち出した母。それがあまりにも簡単に平常心を奪う。親切心が義務かは分らないが、こうして今日の前で相談に乗ろうとしている中杉までも、苛立ちの対象になっていく。

「関係ないってことはないだろう。悩みがあるなら先生に・・・」

「関係ないって言うてんだろ」

荒ぶった声は喧騒に包まれた職員室を静まり返すには十分で、周囲の視線が自分に集中するのを痛いほどに感じる。好奇の視線が余計に心に波を立てる。最早、取り返しの付かないほどに心は濁りきっていた。

「速水、落ち着け、先生は速水の味方だぞ」

落ち着かせようとしているのだろうが、その言葉がさらに世界を壊していく。なんの感情もその言葉は与えてはくれない。

「なにが味方だよ。なんにも知らないくせに偉そうなこと言ってんじゃねえよ」

自慢ではないが、これまで優等生でやってきた。特に教師に逆らっ

たこともなければ問題を起こしたことも無い。教師に、いや、親以外にこんな声を荒げたのは初めてで、自分でもその状況に幾らかの戸惑いがありながらも放たれた矢が戻ってこないように、言い捨てた言葉も訂正しようはなく、

「もういいでしょ。話すことなんてありません。失礼します」

とだけ言い、逃げるようにその場を立ち去る。職員室の奥から名前を呼ばれたが振り向きもせず、職員室を後にした。

怒りや戸惑い、苛立ち。そういった負の感情が歩く速度を加速させる。競歩大会にでも出たらいい線行くのではないかというほどに。足早に教室に戻ると、教室にはいつもの三人のほかには誰もいない。テストも終わって、さっさと帰宅したのだろう。三人の笑い声が耳障りで仕方なかった。

「なんだっ たんだ？」

教室に入るなり声をかけてきたのは優一。説明するわけにもいかず、みんなに嫌な思いをさせたくもなく、無理に平静を装い、

「たいしたことじゃねえよ」

それだけ言うと鞆を持ち、

「行こうぜ、みんな待ってるだろ」

そう言い教室を出る。一秒だって学校にいたくない。家庭、学校。二つの居場所を失った。そう、感じた。

校門には既に神埼たちが待っている。正直、カラオケなんて気分じゃない。それでもオレ一人が行きたくないなどと言えば皆に悪いと思い、渋々ついて行くしかなかった。

「待った？ 幸成が悪さしたから先生に呼ばれてさあ。遅くなりましてあ」

陽気な茂久。普段ならその陽気さに助けられているくせに、今は邪魔くさくて仕方が無い。

「なにしたの？ 速水くん」

長谷川が不思議そうに問いかける。

「別に悪さなんかしてねえよ。大したことじゃねえよ」

言える訳ない。言うわけない。

「その割には結構話長かったじゃん」

「なんでもねえって言ってんだろ」

最低だ。他人に当たる。しかも友人に。その行為がより一層自分の首を締め付ける。

「なんだよ、なんか機嫌悪いぞ幸成。なんかあったのか？」

優一の一言。そして、ほんの少しの沈黙の後、

「別に何でもないよ。悪かったな、大声出して」

冷静になれ。オレらしくも無い。本当に、みんな、ごめん。

優一が気を利かせてくれて、その場はなんとかごまかし、マクドナルドへと向かう。その途中もあまり喋ることはしなかった。

「そつえばさあ」

茂久はコーラを飲みながら周囲を見渡している。

「前にやったやつ、面白かったよなあ」

「なに？前にやったやつって」

前にやったやつ。マクドナルド。この二つから連想されるものは一つしかない。

「もう絶対やらねえぞ。ハンバーガー大嫌いになれるからな」

冷めたポテトを食べながら呟く。

「なにしたの？」

「ハンバーガー百個食べようって遊び。めちゃくちゃ楽しかったよな」

「何が楽しいんだよ。あれからしばらくハンバーガー食べられなかったんだぜオレ。ハンバーガー見ただけで胸焼けしたっての」

舌を少し出しながら波多野が眉間に皺を寄せて言った。

「ハンバーガー百個食べようって言い出したのお前だろうが」

お前が言い出したんだろうが。スーパーサイズミーという映画に感化された波多野は突拍子も無い遊びを思いついたのだ。思い出すだけで胸焼けがする。

「ハンバーガー百個下さいって言ったら、店長出てきてさ、ハンバーガーは衛生の問題上五十個までしか出せませんって言われたのよ。そしたら幸成が、衛生上問題ないハンバーガー五十個を二つ下さいって言つてさ、んで結局ハンバーガーは百個出てきたんだけど、最初のうちは楽しく食べてたんだ。ハンバーグ二つ重ねてダブルバーガーとかってやつたりしてさ。でも残り四十個くらいからは地獄だったよな。吐きそうになりながら皆で食ったつけ。昼にマック行つたのに、食べ終わったのは夕方でき、帰るとき皆で、百個も食えるかボケ、とか愚痴垂れながら帰ったんだよなあ。マジ楽しかった。またやるうぜ。次は、チーズバーガー百個な」

周囲は大笑い。五十個出せるなら百個も出せるだろう。店長のニタニタしながらの断りに少し腹が立ったのを今でも覚えている。

「絶対やらねえ。金かかるわ吐きそうになるわハンバーガー嫌いになるわ、良いことなんて何一つなかったじゃねえか」

優一は笑っている。思い出して少しだけ笑みがこぼれる。こいつらがいてくれて本当によかったと思う。今のオレに居場所は、ここしかない。情けない。

暫く話をした後、

「そろそろ行こっか」

そう言う店を後にするために席を立った。

すぐ近くの駅前のカラオケ。受付は優一がしてくれている。学生証を提出すると、カラオケルームに入る前にフリードリンクコーナーへ。温かいコーヒーをカップに注ぎながら、立ち上る湯気を見つめる。宙に消えていく湯気はまるでオレ自信だ。

トップバッターは大抵が茂久。今日も茂久が真っ先にマイクを握った。

耳に入る音楽と目の前の光景が、まるで別の世界の出来事のようにで眩しくて、汚れたオレには目を開けていられないほどだった。世界はこんなにも綺麗で、美しく、楽しいものなのに、オレだけがちっぽけで下らない存在のように感じる。

みんなは呼び名を決めているようだ。神崎の後に続いて、

「幸成って皆呼ぶし、幸成で」

どうでもよかった。呼び名なんてどうでもいい。というよりは全てがどうでもいい。苛立ちが全てを憎ませる。

数回曲が変わるも、そのどれもが耳を抜けていくだけでしっかりとは聞けていない。コーヒーばかりが進んでいく。

女子メンバーが歌っているとき、優一が耳打ちをしてきた。

「この間は悪かったな。突然皆でお前んちに押しかけて。迷惑じゃ

なかった？」

「そう思うなら連絡くらいちゃんとしろよな」

「ホントのこと言ったらOKしてくれないだろ。お前真面目っ子だしさ」

気を紛らわせてくれるならなんでもいい。今だって、最初は乗り気じゃなかったけれど、どれだけこの状況に助けられているか。一つ一つの事物に苛立ちを覚えるが、一人で家で呆けるよりは何倍もマシだ。

すでにカップにはコーヒーは入っていない。ほんの少しだけ残ったコーヒーがカップの中で円を描いている。女子メンバーの歌が終わると、コーヒーを入れにいくため、

「コーヒー入れてくるわ」

と宣言し立ち上がる。呆けた頭にカフェインが浸透すると気分がよかった。今日はコーヒーがやたら進む。

「私も行く」

神崎が追って立ち上がる。カラオケルームを出てドリンクコーナーへ。黙ったままコーヒーを入れる。砂糖もミルクも入れない。甘ったるいコーヒーは好きじゃない。舌がしびれるくらいの苦さを持つぐらいのコーヒーが丁度いい。

神崎が烏龍茶を入れている。どうせ飲むならジュースなどの単価の高いものにすればいいのに、などと考えていると、



「砂糖も何にも入れなくて苦くない？」

「コーヒーは甘いのは好きじゃない。」

「甘いのが苦手なんだよね」

自分の態度に戸惑う。自分の態度は他人に嫌悪感を与えてしまうのではないか。そう考えながらも、それ以外の態度をすることが出来ない自分に苛立つ。

「なにかあった？」

眉間に皺をよせた神崎は、覗き込むようにこちらを見ている。

「なにが？」

心当たりがありすぎてどれがどれやら。

「なんか、いつもと違うから、速水くん」

「別に何にもないよ。心配かけるようなことはなんにもない。それより、くんづけ止めるんじゃないかなかったつけ？」

普段と違う。誰だってそう思うよな。入れたばかりのコーヒーは絶えず湯気を発し続けている。一口すする。想像以上に熱い。

「じゃあ、今日から幸成って呼ぶね」

照れくさい。何処と無く嬉しい。二つの感情が交差していて、それ

を上手く表現できない。

「神崎」

何故かは分からなかった。ただ、今の気持ちを知って欲しかった。辛さや悲しみを誰かに共有して欲しかった。それでも、誰でもいいのではないのか、という疑問が浮上すると、それ以上言っではいけない気がして、

「いや、なんでもない。そろそろ戻るか」

そう呟いた。

「幸成」

こちらをじっと見据えている。その瞳はまっすぐで、澄んでいて、オレとは違う。ああ、どうしてこんなにも他人を羨ましく思うのかがやっと分かった。オレは光に群がる虫だ。どれだけ恋焦がれても近づけばその身は焼かれる。自分は光にはなれない。分かっているが、求めているのだ。自分も光になりたいと。光のそばにいたい。水面に映った月に手を伸ばしてみても、触れられるのは水面だけで、月には手は届かない。分かっているが、何度も何度も手を伸ばす。愚かな獣。

「神崎じゃなくて美紀でしょ」

照れくさくて、頭の隅にありながらも言えなかった。心の中で数回練習する。そして、

「わかったよ、美紀」

そう言いながら、笑顔の自分がそこにはいた。

カラオケルームに戻ると、みんなは歌も歌わずに雑談に花を咲かせている。内容はあつてないようなもので、下らない事このうえない。それでいい。雑談はそれがいい。

丁度、波多野が彼女とのろけ話をしているとき、優一がトイレに誘ってきた。トイレに行くだけなら一人でいくだろう。何らかの話でもあるに違いない。オレは優一について行くことにした。

トイレの前まで来ると、優一は、

「なにがあつた？」

こちらを見据えながら言った。

「別に何も無いよ」

「何も無いわけないだろ。誰が見たっておかしいよ、今日の幸成。友達だよな、オレら。だったら言えよ。悩みがあるなら相談しろよ。それが友達ってやつじゃないのかよ」

何も言えなかった。優一の言葉は当然で、逆の立場でも同じことを言っただろう。それでも、言えない。言ったところで何にもならないし、それを優一に担がせるのも間違っているように思えて、言葉が詰まる。

「ごめん。理由は言えないけど、正直、オレ、悩んでたんだ。最近いろいろあつて。でも大丈夫だから。わるいな、心配かけて」

「ああ、分かった。あんま心配させんなよ。オレだけなら別にいいんだけどよ」

ありがとう。心からそう思う。こんなにもオレは誰かに支えられている。見えない手が、今にも倒れてしまいそうなオレの背中を支え続けてくれる。それがなにより嬉しかった。一人なんかじゃないんだ、オレは。

「ありがとな、優一」

オレがそう言っていると、優一は肩を叩きながら笑った。

お節介野郎。そう思いながらもそのお節介でどれだけ助けられているか。思ってもらえている。それだけで力をもらえている。

それからトイレに行き、連れションというやつをし、次どちらが歌うかで盛り上がった。ジャンケンで負けてしまったオレが次は歌うことになった。その後、オレたちはカラオケルームに足を戻った。

「たっただいまあ」

優一が大きな声を出しながら部屋に足を踏み入れる。

「なにしてたんだよ、男二人で」

茂久がコーラを飲みながら言った。

「トイレに付き合ってもらってたんだ幸成に。一人じゃ寂しいだろ？」

「長かったし、大のほうだな」

「正解」

今が永遠に続いて、この世に悲しみなんてなければいいのに。そんな幼稚な妄想に頭が溶けていく。

外の景色は見えない。きっと、少しは太陽が顔を覗かせているのではないだろうか。

晴れていれば、いい。

## 第十二章 ビデオテープ

十二月二十一日。土曜日。時刻、十三時四分。

天気、曇り。

相変わらず、家庭内のゴタゴタは続いている。二週間近く口喧嘩以外で親と話をした覚えが無い。本当に最低な状態だ。考えるだけで憂鬱になる。

誰もいないリビングは、静まり返っていて聞こえてくるのは時計の秒針が進む音だけだ。定期的な音は不快感を与える。

することもなくテレビをつけるのだが、興味をそそるものはやっていない。チャンネルを面白くもなさそうなグルメ番組にしたままソファーに横たわる。ブラウン管では下らない事に大笑いをする面白くも無い芸人が映っている。

いつにもなく気分は落ちていた。今、優一がここにいたらいつものお節介を焼くところだろう。明後日には終業式がある。そうなれば学校という居場所もなく、今以上の生きづらさが待っている。

何もする気力も無く、宙を見つめている。その時が永遠にも感じられていたとき、その永遠を突如破壊するチャイムの音。

「誰だよ」

そう呟きながら思考を巡らす。親なら鍵を持っているのでチャイムなど鳴らす必要は無い。優一たちは部活のはずだし、友人の誰か

が訪ねてくるはずもない。では誰が。そう考えながら玄関につくと無造作に鍵を開け、扉を引く。

「こんにちは」

何のことはない、唯の郵便配達員だ。いろいろ考えていたことを軽く自嘲する。

「こんにちは」

「速水幸成さんにお届け物です」

「オレに？」

覚えが無い。

「サインいただけますか？」

二十代ぐらいだろうか。がっしりとした体格が威圧感を与えるその男は、小包を渡しながらこちらには視線を向けずに言った。

受領印の欄にフルネームでサインする。サインされた受領書を受け取ると男は急ぎ足で消えていった。まだ配達先がいくつもあるのだろう。もう少し愛想よくしてもいいんじゃないか。

「なんだこれ？」

A4の紙程度の大きさ。真っ白な包み紙に梱包されたそれは、奇妙な雰囲気を持っている。中を見ていなくても、何故か奇妙であると感じられた。

リビングに戻り包み紙を丁寧に開けていく。何十にも梱包されたそれはしばしの格闘の後に姿を現した。

一枚の手紙と何の変哲も無いビデオテープ。

「エロビデオか？」

呟きながら手紙を開く。その内容が数日前を思い返させる。

『記憶屋 先日発注された記憶をお届けします。内容をご確認ください。記憶の交換は承りませんのでご了承ください。代金は記憶をご覧になったご本人がお決めになった金額を所定の口座にお振込みください』

「本当に送ってきたよ」

120分のビデオテープ。普通のビデオテープ。しかし、異様なオーラが漂っているように感じられた。

それをデッキに入れる。チャンネルをビデオにし、再生ボタンを押す。

記憶の再生が始まった。



### 第十三章 邂逅

テレビからは砂嵐のようなザーザーという音が聞こえてくる。映像も砂嵐。とどのつまり、何も映ってはいない。

幸成はただ、その砂嵐を見つめている。その瞳からは何の感情も窺えない。

「なんだよ、これ」

砂嵐が一分ほど流れただろうか。幸成はつまらなそうにこぼすと、リモコンを手についた。どうやらビデオを消そうとしているようだ。指が停止ボタンに触れる直前、ブラウン管からある映像が流れはじめた。

「おっ、始まった」

長い廊下。廊下を歩く廊下だけが辺りに漂う。

退屈そうな幸成。彼の退屈とは全く関係なく映像は続く。

「ようっ」

突然、映像に映りこむ男。長髪で、いかにも軽そうな男はブラウン管の向こうの幸成をにたにたしながら見つめている。

「びっくりさせないでよ」

もう一つの声は女性のようだ。そこから女と男の他愛の無い会話が始まった。

幸成にはその女性の声に聞き覚えがあった。聞きなれた声。だが答えはでない。どうしても、この声が誰の声なのか分からなかった。

しかし、答えはあっけなく分かることになる。男の一言が教えてくれたのだ。

「良子、なんか今日元気ないじゃん。どうした？」

その一言が幸成の中のもやもやを吹き飛ばす。

「母さん？なんで母さんがこんなもの撮ってるんだ？」

その疑問は当然で、映像からは幸成の母親である良子が映像を撮っていることが分かる。明らかに良子目線の映像であるからだ。何故自分の母親が撮った映像が『記憶屋』から送られてきたのか。幸成にその理由が分かるわけもなく、ただブラウン管を見つめるしかなかった。

「え？別に普通だけど？裕樹は相変わらずだね」

幸成の母、良子が裕樹と呼んだ男には、幸成は面識がないようで、彼に対しては大した反応をしていない。

「いつでもなんでも全力投球。そして元気。それがオレだよ」

「知ってる」

笑いながら良子が言った。

誰もいない廊下には、二人の声だけがこだましている。

しばらく二人の会話が続いた。大した話ではなかったのだが、幸成は黙ってそれを聞いていた。

また、映像が変わる。緑の綺麗なテニスコート。周囲を見渡すように映像が動く。映像にはたくさんの人が映っていて、そこかしこで会話をしているようだ。会話をしているようだ、と述べたのは、そこに映る人々の会話が聞こえないからだ。明らかに会話をしているように見えるのだが、会話は聞こえてこない。その静寂を破るように、また、あの男が現れた。

「どっちに賭ける？」

微笑しながら裕樹が言った。

「どうせ裕樹がまた負けるよ。一回も勝ったことないじゃん。勝負するだけ無駄だよ、やめといたら？」

良子の声は何処か楽しそうだ。

「馬鹿野郎、今日こそは勝つよ。このまま負けっぱなしじゃかつこ悪いしな。オレに賭けるよ、小遣い稼がせてやるぞ」

裕樹は右手に持ったテニスラケットをくるくると回している。その間も相変わらず、周囲の人間はざわついているように見えるのだが、声は聞こえてこない。その違和感はとても奇妙なものだった。

二人の周囲にいるざわつく十数人の大学生と思われる集団。にもか  
かわらず彼らの会話の一端すら聞こえない。裕樹と良子、この二人  
の会話音以外はスピーカーから流れてこない。奇妙。幸成もその違  
和感に気づいているようで怪訝そうな顔をしている。

「勝負しろや。今日こそオレが勝つ」

裕樹が声を張り上げた。その相手は、草原のような緑のコートの  
真ん中で、座って靴紐を結びなおしている帽子を目深にかぶった男。  
その男は裕樹を肩越しにちらりと見ると、また靴紐に視線を戻した。

「ほら、さっさと準備しろよ。勝負だ勝負」

裕樹はその男の腕を掴み無理やり引き起こしながら言った。それ  
にその男は、

「またやんのかよ」

気だるそうに答えた。

映像を凝視していた幸成だったが、とある事実はこのときまだ気  
がついてはいなかった。それは男が帽子を深くかぶっていたからで  
も雰囲気は今よりも少し違うからでもなく、幸成の頭の中にそれに  
気づこうとする準備が足りなかったただけだった。

帽子の男はやる気がなさそうにラケットを手にとると、一言二言  
裕樹に向かって何かを言うと、幸成から見て奥側のコートに向かっ  
た。

「いくぞ」

裕樹のサーブ。高くトスされたボールが重力に引かれ落下しようとした刹那、ボールはラケットのガットによって弾ける様に飛び、相手コートに突き刺さった。

それを丁寧にはフォアハンドで帽子の男がリターンする。厳しい位置に返されたボールを懸命に追う裕樹。激しい打ち合い。ただ、テニスに関して詳しく知らない幸成であったが、二人の表情が、どちらが優位でどちらが余裕があるかを知らせていた。

歯を食いしばるように懸命にボールに食らいつく裕樹。それとは正反対に口元にうつすらと笑みを浮かべる帽子の男。

裕樹のコートに深々とボールが返ってくる。前にでる余裕すらない。リターンで精一杯で下がり気味にテニスをやる裕樹。それをあざ笑うかのような帽子の男のドロップショット。ボールはネット上をゆっくりと通過すると裕樹の届かない位置にポトリと落ちた。

「くそつたれ。正々堂々と勝負しろや。せかいことしやがって」

喚く裕樹。それに対して至ってクールな反応の帽子の男。

「自分の弱さを正当化しようとするなよ裕樹。くやしかったらオレに勝ってみろ」

それから裕樹の劣勢で試合は進んでいった。テニスをやったことのない幸成にとっては退屈でしかなく、何の感情も湧かなかつた。好きでもないテニス。おまけに試合をしているのは知り合いでも、ましてプロ選手でもないのだから当然と言えば当然なのかもしれない。幸成が携帯をいじりだしたのも仕方ないことだった。

携帯に目をやる幸成の視線をブラウン管に戻させたのは、マッチポイントを向かえ、裕樹を応援している良子の声だった。

「頑張れ、裕樹」

マッチポイントのラリーを制したのはやはり帽子の男。実力差が大きくあるようなので当然といえば当然の結果だ。

「また負けたあ。いつになったら勝てるんだよオレ」

うなだれる裕樹。肩に手を置いて「まだまだだな」と帽子の男。

「ちよつとは手加減してあげなよ、亮」

良子の言った『亮』という言葉。その言葉に目を見開いて画面を睨む幸成。

「亮？」

帽子を脱ぐと、男の顔が初めて確認できた。かなり若いが、まぎれもなく、速水亮。幸成の実の父親だった。

「父さん？若いなあ。・・・てことは、何年も前の映像なのか、これ」

何故こんな映像が存在するのか。そして何故こんな映像を『記憶屋』が所持していたのか。その疑問に対する答えが幸成に解決できるわけは無かった。

雑談を続ける三人。試合を終えて体が冷えたのか、亮はジャージを羽織った。そのジャージにはローマ字で『SAKURAGAKA A UNIVERSITY』とある。その文字が幸成の瞳に映った。「桜ヶ丘大学？じゃあ、サークルかなにか？父さんと母さんが大学に行ってたなんて聞いたことないんだけどなあ。っていうか、高卒って言うってたのに」

幸成の知る限り、二人が大学に通っていたという事実はない。おまけに桜ヶ丘大学といえば私立でも有名な大学で、そんなところに通っていたなら何かしら話を耳にするはずだった。にもかかわらず、幸成は知らなかった。その上、高卒だとまで聞かされていたのだ。幸成の困惑した表情も納得である。

「次までに練習しまくつとけよ。このままじゃ、一度もオレに勝てないままだぞ。まあ、どんなに練習しても無駄だけどな」

亮は得意げに裕樹に言った。それに、

「もう諦めようかな」

と弱気の裕樹。それを慰める良子。

ドラマでも見ているかのような感覚。誰かが言っていた『人生はドラマよりドラマティックだ』という言葉をその時、幸成は思い出していた。

「なんなんだよ、これ」

何もかもが不可思議、理解不能。素人が撮ったとは思えないほど

にブレのない映像。三人以外の声が収録されていない状況。聞かされていたものとはことなる両親の姿。自分が生まれる以前に撮られたであろうはずの映像、にも関わらず異常なまでの鮮明さ。そのどれもが、幸成の『理解』を簡単に飛び越えていた。

幸成にとって、謎ばかりの内容。彼にとって不可解な映像がこれから続くのを、このとき、幸成が知るはずも無かった。そして、『記憶屋』に注文した、『自分の見たい記憶』の真実が、思いもよらぬ形でこのビデオテープの続きに収められていることも、知るはずが無かった。



## 第十四章 邂逅その2（前書き）

知らないことのほうが、時に幸せなこともある。そんな言葉を聞いたことがあります。本当にそうなのでしょう。私は、例え自分が自分にとってマイナスの結果をもたらす事実であつても、知りたいと思います。それが自分を不幸にしたとしても、知らないということはこの上も無いほどに残酷だと思うからです。

## 第十四章 邂逅その2

「オレのなにが悪いわけ？」

「全部」

「全部は言いすぎだろ」

「性格じゃない？」

「一理ある」

「お前らなあ」

三人ともなんとも楽しそうに会話をする。幸成にとって、こんなにも楽しそうな顔の両親など見たことも無かった。それがやけに、胸を締め付けた。

「もう亮とは勝負しない。勝てる奴としかやらないぞオレは。ってことで勝負だ、良子。さあ、かかって来い」

「先週良子にボロ負けしたこと忘れたのかよ」

「先週は、もう良子とは勝てないからやらないって言ってたよね」

どうやら良子にも勝てないようだ。馬鹿にされたのが余程こたえたのか、裕樹は肩を落としている。それを慰めるように、良子のもと思われる手が裕樹の肩に伸びた。裕樹の肩にそっと置かれた左手の薬指にはシルバーの上品なリングが煌いている。リングの中央

には横に一本黒いラインが入っている。

幸成はその指輪に思わず見入った。その指輪は今も良子の左手の薬指で光っている指輪そのものであった。

「このときからつけてたペアリングなんだ、あれ。何十年前のペアリングだよ。いつまでも学生時代に買った指輪なんかつけてんなよ」

煌く指輪が妙に気になって、視線はそれにだけ向いていた。

「来年、いや卒業までには絶対にお前らに勝つからな」

「無理すんなよ。元サッカー部が元テニス部にテニスで勝てるかよ」

「だから卒業までに、だよ。お前らしばらくラケット握るの禁止な」

「禁止って、どのくらいよ？」

「二年間」

「ふざけんな」

茂久たちとのやりとりを思い出させる。つまり、くだらないということだ。

「いつの世も学生ってのはこんな感じか」

幸成が感慨にふけっていると、また画面が変わった。

一室。七畳ほどの部屋。状況から考えて学生マンションだろうか。雑多な雰囲気が家主のずばらさを窺わせる。正方形に近い形の部屋の真ん中に置かれたコタツ。そこには亮が座っている。良子の声が聞こえることから、相変わらず良子目線で映像が続いているのがわかる。

「コーヒーってなんでこんなに苦いんだろうな。そもそもこんな苦いもの飲もうって思った奴って頭おかしいんじゃない？」

湯気の立つコーヒーをすすりながら亮が言った。

「ヤギか何かがコーヒー豆を食べていたら元気になっていたのを見て、飲み始めたって話を聞いたことがあるけど。亮、苦いもの嫌いだもんね。砂糖とミルク大量に入れてるし」

「ビールも苦手だ。なんで大人ってのは苦いものばかり好むんだろうな」

「亮が子どもなんだよ」

そう言いながら良子もコーヒーをすすった。

「んで、裕樹はいつ帰ってくるんだよ。バイト終わってるはずだろ」

「そろそろのはずなんだけどなあ」

会話から察するにこの部屋はどうやら裕樹の部屋のようにだ。家主のいない部屋にいることから三人の親密さが分かる。

二人がコーヒーを飲み終えるころ、ドアが開き裕樹が帰宅してき

た。

「たっただいまあ」

疲れた顔で登場。いそいそとコタツに座る。

「遅いよ。いつまで待たせるんだ」

三人の雑談がまた始まった。それを見ながら、そこに映し出された映像に違和感を覚える幸成。どこに違和感があるのかと聞かれても答えられない。ただ、違和感があった。

「・・・」

しばらく続く雑談。それを見ながらも幸成は考え続けた。違和感の正体を。

「んで、今日はなんだよ。話があるんだろ？」

亮はそう言うと、ほとんど残ってはいないだろうコーヒーを飲み干した。

「うん。話っていうのはだな・・・」

裕樹は視線を天井に向けた。そして、

「オレ、大学やめることになった」

「・・・はあ？」

亮にとって突然すぎる内容だったのだろう。亮は啞然としている。

「大学辞めて、働くことにした」

「なんで急に」

しばらくの沈黙の後、

「子どもができたんだ」

ぽつりと言った。

「子どもって・・・マジで？」

「マジだよ」

裕樹の顔は真剣だった。そして、

「だから大学辞めて、働く」

そう言った裕樹の左手の薬指には、リングの中央に横に一本黒いラインが入ったシルバーリングが光っていた。

## 第十五章 邂逅その3

それが幸成の感じていた違和感の正体だった。

父親であるはずの男の指にはなく、見ず知らずの男の薬指で輝く見慣れた指輪。それは紛れもなく、普段から両親がはめている指輪だった。

結婚指輪とばかり思っていた。二人が常にはめている指輪。それにこんな背景があつたなんて考えもしなかった。あれは一体なんなんだ。今、目の前の映像に映る知らない男のはめている指輪は一体なんなのか。後日、全く同じものを両親が二人で買いに行ったなんて到底考えられない。頭をフル回転させて出た結論は、男のはめている指輪は、今現在、父親のはめている指輪と同一のもの。ただそれだけだった。一体なぜ、男のはめている指輪を今、父親がはめているのか。幸成に分かるはずもなかった。

「なんだよ、これ」

自分は一体誰の子どもなのだろうか。亮？それとも裕樹？どちらにしても多大なショックを幸成に与えるには十分すぎる事実だった。

「裕樹だけじゃなく、もちろん私も大学辞める。子ども産むのに大学なんて通えないし。せつかくできた子どもを堕ろしたくなんてないから」

「二人で話し合っただ。二人とも考えは同じだった。子どもの命を奪うなんて間違ってる。二人で頑張って育てていこうって」

二人の声から強い意志が感じられる。

「・・・」

亮は黙ったまま空になったコーヒークップを見つめている。

長い静寂だった。三人とも口を開こうとせず、ただ空気だけが張り詰めている。

その静寂を破ったのは、黙ったままだった亮の一言だった。亮は顔を上げずに、

「約束しろよ、良子も産まれてくる子どもも絶対守るって。約束しろよ、絶対幸せにするって。何が何でも守れ。何が何でも幸せにする」

精一杯の思いを込めて言った。

亮の強く強く握り締めた拳が小刻みに震えている。それが良子に対する友人以上の感情を表していた。

「約束する」

裕樹はそう言って、視線を画面のほう、つまり良子に移して、こくりと頷いた。

画面が一瞬真っ暗になり、すぐに映像が切り替わった。その間、幸成の頭の中は、ただ、真っ白だった。



場所は変わらず裕樹の家なのだが、裕樹の姿はなく、映像には亮の姿だけが映っている。

「あいつ、いつも帰りってこんなに遅いのか？」

亮は視線を良子に移さずに独り言のように呟いた。

「いつも大体十時くらいかな？帰ってくるの。毎日毎日産まれてくる子どものために遅くまで頑張って働いてもらってますよ」

良子の声は幸せそうだ。会話から、先ほどの映像からしばらく日にちが経っていることが分かる。

「ふーん」

そう言つと、亮は頭を掻きながらため息をついた。

「しばらく顔見せなかったね、亮。なにしてたの？」

良子の問いに少しの間を置いて、亮が

「気持ちの整理」

とだけ言った。

「気持ちの整理？」

この質問にも先ほどと同様に間を置いて

「ああ」

とだけ答える。

「言いたいことあるならちゃんと言いなよ」

少し苛立った声だ。

視線を初めて良子に移すと、めんどくさそうに亮が話しを始めた。

「なんていうか、実感わかなくてさ。ついこの間まで三人でいつも一緒にいて、毎日遊んでたのに突然妊娠とか大学辞めるとか言われたからさ、頭こんがらがって、んで、実感湧かなくてさ。嫉妬もあったと思う。裕樹に良子を取られたつてのと、そして良子に裕樹を取られたつてのと。オレにとって二人とも大切な存在なんだ。それなのに二人に嫉妬してる自分が恥ずかしくてさ、顔出せなかった。連絡しなかったことは謝るよ。ゴメン。でもオレの気持ちも少しは理解してくれよ。ほんの少しだけでいいからさ。理解してくれよ」

今にも泣き出しそうな声。それでも、先ほどの映像のときとは違い顔を上げて喋っている。以前よりは気持ちの整理がついているのは確かだった。

「亮はちゃんと卒業しなよ」

「当たり前だ。なんのために大学に通ってると思ってるんだよ。誰かさんたちみたいにセックスばかりして子ども作るために大学に通ってるんじゃないんだよ、オレは」

悪態をつきながらも、表情は暗く見える。それを察してか良子も、

「そうだね」

と一言だけ返した。

しばらく、二人ともあまり喋ろうとはしなかった。亮は喋る気分ではないのであろうし、良子はそれを察してだろう。下唇を噛み締めている若い父親の姿を、幸成は黙って見つめた。

「仕事ってなにしてんの？」

硬い空気に気圧されてか、亮が口を開いた。

「知り合いのつてで車の整備工場で働いてる。毎日顔も手も真っ黒で帰ってくるんだから。この間なんかパンダみたいな顔で帰ってきたのよ。その顔で街を通ってきたと思うとおかしくておかしくて。私大爆笑しちゃった」

「そりゃ可哀想にな、あいつ」

口元にはうつすら笑みが浮かんでいる。パンダみたいな顔の裕樹を思い浮かべているのだろうか。

幸成の頭に、幸せそうに笑う良子の顔が浮かんだ。久しく見えない顔。そのすぐあとに泣き顔が浮かんできて、数日前のことに思いを巡らせた。

「式って挙げるのか？」

「当分は無理じゃないかな。お金もないし。子どもが産まれて、し

ばらくしたら、考えるかもね」

二人のやり取りも、今の幸成の頭には入っていない。思いは完全に別のところに向いているからだ。数日前の母の泣き顔と、裕樹と言つ男との間にできた子ども。その二つに思考は完全に奪われていた。

幸成の感情とは関係なく、当然のように映像は続く。

「なるほどねえ。女なら式は絶対あげたいよな」

「あたりまえじゃん。何回もお色直したい。着物もドレスも着たいし、ケーキ入刀もしたい。女の子の夢よ、夢」

「結構金かかりそうだな。裕樹、ご愁傷様。しっかり働いて、良子のお色直しに消える金を稼げよ」

幸成は楽しそうな会話が、やけに耳障りに感じていた。

## 第十五章 邂逅その3（後書き）

これからがやつと物語の盛り上がりどころに入ります。だらだらとしてきましたが、もりあげていく予定なので続きも読んでください。お願いします。よければお手数ですが感想等もよろしくお願いします。

## 第十六章 邂逅その4

相変わらず、幸成のいる部屋には若かりし頃の両親の楽しげな声が響く。

改めて、幸成は考えを巡らせた。この映像は何なのか。本当に過去にあった事実なのか。事実だと仮定しても何故、母親である良子がこんな映像を撮り続けているのか。謎は深まるばかりで、この映像の信憑性はその謎のせいで無きに等しい。しかし、作り物だとしてもあまりにもリアル。どこをどう見ても十数年前の若い両親。幸成にできることは、謎から目をそむけ事実だと無理やりにも受け止めることしかなかった。

「最近なんだか体がだるくてさあ。子どものこともあるし、今度病院行って来ようかなって思ってるんだけど。暇だったら亮、一緒に来てくれないかな？」

「なんでオレが行かなきゃいけないんだよ」

「裕樹は遅くまで仕事だし。どうせ暇でしょ？」

「暇で悪かったな」

自分に似ている。幸成はそんな風に思った。そっけない態度や口調。亮に似ている所は自分に多々ある。それでも、実の子ではない可能性。どう受け止めたらいいいのか分からなかった。その困惑とは別に、二人のやり取りが微笑ましかった。

「だめ？」

「どうせ暇だしいいよ。いつ行く？」

亮の仏頂面を最後に、また画面が真っ暗になった。

次に映像がブラウン管に現れたとき、少しだけ微笑んでいた幸成の表情は完全に固まることになる。

ベッド。その上に白い布を顔にかけられた人が仰向けに寝ている。誰かは確認できない。ただ、そこに寝ている人間が既に死んでいることだけはわかる。

「・・・」

急展開すぎて、幸成は言葉が出なかった。先ほどまでの和気藹々とした雰囲気から突然、静まり返った病院。おまけに目の前には死者が横たわっている。言葉が出ないのも当然であった。

「良子」

病院の一室と思われる部屋に亮があわてた様子で駆け込んできた。走ってきたのだろう、額には汗がにじんでいる。

「亮」

良子の声が震えている。小さな声で、あまりにも弱い。

「裕樹が、死んじゃった。車に、轢かれて」

友人の死を知った亮は、呆然と冷たくなつた裕樹を見つめている。額に滲んだ汗の一粒が頬を伝つて、悲しみから溢れ出した涙のように床に落ちた。

あらゆる生あるものの目指すところは死である。フロイト。死とは生の一部分であり、悲しむべきものではないのかもしれない。人は生まれた瞬間から死ぬために歩き続ける。生そのものをマラソンに例えるなら、誕生はスタートラインであり、ゴールは紛れもなく死である。ならば悲しむ必要は無い。最終目的がそれなのだからだが、人はそう割り切れない。仮に生の真理が死という結果であったとしても、それを受け入れるにはあまりにも過酷で残酷で無情だ。生の対極は死ではない。生そのものが死であるからだ。それでも、人は死を畏怖する。それは当然だ。死が何をもたらすのかを誰も知らないのだから。人が死を悲しむのは、仕方の無いことなのだ。

突然、思い出したように亮にしがみつく。

「おい、起きろ」

そう言いながら動かなくなつた裕樹を揺する。

「起きろよ。さっさと」

「起きろよ」

「おい」

「起きろよ」

「起きろ」



「起きろって言うてんだよ」

「裕樹」

「起きろよ」

答えが返ってくるはずも無い言葉を投げかける。何度も。何度も。

人間は常に試され続けている。運命という名の虚構に。それが虚構であると知りながらも、自らに降りかかる出来事に運命と名付け、それを受け入れようとする。全ての事柄を運命というたかだか漢字二文字に託してもいいのだろうか。生や死を運命という言葉に置き換えることは正しいことなのだろうか。正しいはずが無い。この世界に足を踏み入れた瞬間から未来が決められているのなら、生きるということ自体があまりにも下らない、馬鹿げたものになってしまう。人は運命を受け入れてはならない。それは愚行であるからだ。それを分かっているからこそ、亮はこうして、叫び続けているのかもしれない。

「幸せにするって言ったじゃないか。大切にするって言ったじゃないか。守るって言ったじゃないか。約束したじゃないか。何してんだよ。起きろよ裕樹。起きて二人を守れよ。裕樹。裕樹。さっさと起きろよ」

死者は、何も語らない。何も残さない。形あるものは何も。それでも思いは消えない。死者に対する思い。それは消えることは無い。

「なんだよ、車に轢かれてって。簡単に死んでんじゃないよ。さっさと起きろ」

「亮、どうしよう。どうしよう。私、どうしたらいいの？ねえ亮。ねえ」

「わかんないよ。何が何だかオレにもわかんないよ」

二人の困惑が伝わってくる。こんなに取り乱した父親の姿を幸成は初めて見た。

突然、映像が床に近づく。同時に、

「うっ」

良子の呻き声が響く。

「どうした？」

亮の問いに対する返事はない。

「おい、良子」

亮の問いに呻き声しか出ない。

「良子。良子。大丈夫か」

「っう」

「誰か。誰か。良子が。良子が」

病室には亮の叫び声がこだました。

## 第十六章 邂逅その4（後書き）

話が急展開すぎると思われるかもしれませんが、一応理由がきちんとあります。それをご理解した上で読んでください。お願いします。改善につなげていけたらと思いますので感想、よろしくお願いします。

## 第十七章 邂逅その5

「だれかあ」

叫び声がいつまでもこだましている。それは鬼気迫るような声で、いつまでもいつまでも反響し続けた。

画面が暗くなつた後も声は響き続けた。その後、医者や看護士と思われる数人の足音と声が聞こえてきた。騒然とした雰囲気音が音となって感じられた。

暗くなつた画面が明るくなると、そこはベッドの上。どうやら良子は入院しているようだ。

「・・・」

狭い個室には誰もいない。

そこへ亮と医師がゆっくりと病室へと入ってきた。

「調子はどうですか？塩崎さん」

優しく、なだめるような声。

「ええ、なんともないです」

「そうですか」

亮は黙ったままベッドの横に置かれた椅子に腰をかける。一つ一つの動作に気を配っているように見える。それは優しさからか、動揺を隠す為からかは定かではない。

「葬儀、どうだった？」

穏やかな声の裏に不安や悲しみが佇んでいる。そんな印象を受ける声だった。

「お前の分も見送ってきたよ」

「そっか。ありがとう」

空気が張り詰めている。

「今は自分の体のことだけ考える。他の事考えてたら体に障るしさ」

亮は穏やかに言った。

「大丈夫。今は痛みとかもないし。少し体がだるいくらいかな」

「寝てばかりだったら体もだるくなるさ」

にこやかに答えた。

窓から見える景色は街を一望でき、見晴らしはすこぶるいい。それが療養に役立つかは定かではないが。

「周りくどいのは好きじゃない」

良子の声は凜としている。

「知ってるよ、そういう性格だったのはさ」

「だったら、全部話して欲しい」

「何を？」

「病気のこと。お願いします、先生」

表情が曇る。言わなければならないこと。それがどんなに残酷なことでも告げなければならなかった。それが例え大切な人を不幸に陥れることだとしても、伝えなければならなかった。それを、亮は心の中に持っていた。

「別に大したことじゃないよ。すぐに治るさ」

亮はできるだけ平静を保とうとしているのがよく分かる。あまり演技力はないようだ。何かを隠しているのがばれただ。

「お願い、ちゃんと教えて。知りたいの。先生、お願いします」

友人以上の感情を抱いている相手に、過酷な言葉を投げかけることが容易にできる人間が世の中にいるだろうか。容易なことではない。それなりの覚悟が要求される。自分にも、そして相手にも。その覚悟が彼にはできていなかった。自らの言葉で彼女を不幸にすることを、彼にはできるわけが無かった。それでも、しなければならぬ。裕樹のいない今、彼女を守るのは自分にあると感じていた。だからこそ、この役目は自分がしなければならぬ。

沈黙の後、彼の中の覚悟が固まった。

「・・・子宮肉腫・・・だつてさ」

「子宮・・・肉腫？」

聞きなれない言葉だったのだろう。良子は反復するように言った。

「かなり稀な病気らしい。普通は年配の人が発病する病気なんだ。けど良子はまだ若いから進行も早いらしい。詳しくは先生から聞いてくれ」

幸成も聞いたことはなかった。ガンかなにかだろうか。そんな程度の想像しか幸成にはできなかった。

「いいですか？塩崎さん。子宮肉腫というのは婦人科のがんの中でもまれな病気で、子宮体部がんの2～5%です。子宮肉腫は、子宮頸部より体部に多く発生し、その大部分は筋肉から発生します。病期は四つに分かれていて、あなたの場合は第三期です。肉腫は子宮の外に広がっていますが、まだ骨盤内にとどまっている状態です。そして、子宮肉腫は大きく分けると四種類あるのですが、あなたの場合は平滑筋肉腫と呼ばれるものです。あなたのように若い方がこの病気になるのは非常に稀なケースですが、若い分、進行も早く、できるだけ早期に手術が必要です。」

医師が淡々と喋る横で亮は俯いたままだ。内容は既に聞いているようで、心ここにあらずという感じだ。

「手術って、どんなものなんですか？」

当然の問いだ。この状況下ならだれもが気になるだろう。だが、その答えはあまりにも絶望的なものだった。

「子宮全摘術、両側付属器切除術、リンパ郭清を行い、可能な限り肉腫を切除するという手術内容です。両側付属器とは両方の卵巣と卵管のことです。リンパ郭清とはリンパ管とリンパ節を一塊として摘出する手術のことです」

子宮を取り除く。女性にとってこれほどまでに辛いことがあるだろうか。まだ二十台前半の良子にとってはあまりにも酷な告知だった。それは絶望でしかなかった。ただ、それよりも気になることがあった。

「お腹の子どもは、どうなるんですか？」

気になって当然だった。

その気がかりを無情にも切り捨てる言葉が返ってくる。

「早期に手術をしなければ危険な状況です。今、妊娠二ヶ月半程度ですが、出産まで手術を待つというのは危険すぎます。正直、お子さんについては諦めるしかありません」

夫になる予定の男が死に、お腹に宿した子は諦めなければならぬ。そして、自分の命も危うい。人生のうちにこれ以上の底があるなら教えて欲しい。そんな状況だった。

知らされなかった事実。幸成の混乱はピークに達していた。

「オレは、誰の子どもなんだよ。母さんの子どもですらないのかよ。」



オレは一体、誰なんだよ」

幸成の頬を涙が伝う。

「実の子じゃないんだから愛されていないのも当然か。なんだ。簡単なことだったんだ。そりゃ愛されていないよ。そりゃオレに興味なんかないよ。」

あまりの出来事に思わず笑う幸成。

「ははは。こんな結末かよ。オレが望んだのはこんな結末じゃないんだよ。愛されているかそうじゃないか。それだけでよかったんだ。こんな事実知りたくなかった。知らないほうがよかった。ははは。ふざけんなよ、ちくしょう」

愛されたい。ただそれだけを強く望んできた男にとって、どうしようもないほどの結末。幸成の頬を伝う涙はとめどなく流れ続け、ひざの上に落ちていく。

「ふざけんなよ」

それだけ言っていると視線を落とした。

「そうですか。わかりました」

良子も同様に、視線を、落とした。

窓から見える空は、良子の感情とは無関係に、透き通るほどに晴れ渡っていた。

## 第十七章 邂逅その5（後書き）

子宮肉腫という病気に関する知識は、正直あまりありません。聞いたことがある程度なのでもしかしたら内容に間違いもあるかもしれません。一応私なりに調べたりしたのですが足りない部分もあるかと思っています。ご了承ください。感想等、お待ちしています。

## 第十八章 邂逅その6

幸成は、零れ落ちる涙を拭った。拭っても拭っても溢れる涙。自分が弱い人間に思えて、それがたまらなく嫌だった。

噛み締めた唇は、幸成の思いそのものであった。

もうこれ以上、記憶を見たくなんてなかった。もうどうでもよかった。もう、記憶を見るのをやめようと思った。その思いを、過去の両親の声が断ち切る。

「手術、体力が回復次第するらしいな」

「うん」

亮は笑顔だ。ただ、それは、誰が見ても滑稽と感じるほどの造り笑顔だった。亮も精神的につらいのは言うまでも無い。それでも、精一杯の笑顔と元気を良子の前では見せなければならなかった。それが彼にできる唯一のことだった。

「昨日さ、部屋にゴキブリ出てさ、夜中に一人で大騒ぎしちゃったよ。なんでゴキブリって怖いんだろうな？不快害虫って言葉通り、特に何にもしないけど、いるだけで不快だよなあ。マジ気持ち悪いよな」

「そうね」

「ベッドの下に入りやがって、てんやわんや。ゴキブリの上で寝るのも嫌だし、かといってベッドの下にゴキブリを退治する術はない

し。もう最悪でさ、三十分もゴキブリと格闘したんだぜ」

「そうなんだ」

「結局ベッドどかしてさ、丸めた本で潰したんだけど、その本がさ、慌ててたせいでゼミの教科書だったんだ。最悪だろ？んで教科書捨てちゃった。新しいの買わなきゃなあ」

「そう」

身振り手振りの無駄に大きな亮。まるでピエロだ。

「でも新しい教科書買うつていっても、もう十一月だしもつたいないよな。どうせ来年になったら別の教科書買わなきゃいけないんだし、買わないでおこうかなあ」

大げさに腕組をしている。頭までひねって。その滑稽さは、やはりピエロを連想させる。

「買っておいたら？どうせ必要なんだし」

落ち着いた印象を受ける声。二人の声のトーンは正反対だ。

「でもさ、もつたいないじゃん。オレもそんなに金持ちでもないしさ。やっぱり買わないでおこうかな」

「なら、買わないでおいたら？」

さながら喜劇だ。

「そうだな。買わない。決めた。うん、買わない」

何度も首を縦に振る。その様が餌をついばむ鳩のようだと幸成は思った。

「なあ、来年誰のゼミとる？また一緒のゼミにしようぜ。良子がいないとオレ単位取れないだろうし。なっ？頼むよ」

良子は、答えない。

「なんだよ、オレと一緒にじゃ嫌なのかよ」

口を尖がらせている。いちいちオーバーリアクションだ。

しばらく黙っていた良子が口を開く。その言葉に、映像の中の亮、そしてそれを見ている幸成、二人の表情が強張る。

「大学やめる。私、子ども、産む」

弱弱い声。だが、決意の満ちた声。

「なに言ってるんだよ。だって・・・」

「決めたの。産む。裕樹の子ども、産みたい」

「でも、そんなことしたらお前は・・・」

続きの言葉を飲み込む。それを口にしてしまうと、それが現実になっってしまうようで、言えなかった。

「死んでもいい。産みたいの」

「誰が育てるんだよ」

「お父さんとお母さんに頼む」

「そんなの、聞いたことないよ」

首を横に振りながら、良子から視線を逸らす。

「産みたい。裕樹の子ども。分かってくれるよね？ 亮なら、分かってくれるよね？」

「分かるわけないだろ」

今にも泣き出しそうな声だった。亮の混乱が窺える。

「どうしても産みたい。分かってくよ、亮」

「分かるわけないだろ」

声を張り上げる。病院中に聞こえるのではないかと思えるくらいの怒号。良子の一言に完全に激昂していた。

「死ぬんだぞ？ 早く手術しないと死んじゃうんだぞ？ 何考えてるんだよ。裕樹を失って、お前まで失えって言うのかよ。ふざけんな。ふざけんなよ」

思いをぶつける。それは道理で正論で当然で、あまりにも当たり前のもだった。それでも良子の決意を変える程ではなかった。

「どの道、子どもは産めなくなる。死んだらもちろん生きてても、もう子どもは産めない。この子が最初で最後の子ども。どうしても産みたい。私が生きた証が欲しい。裕樹が生きた証が欲しいの。そのためなら、この命いらない。死んでもいい。この子が、どうしても産みたいの。産みたいのよ」

泣きじゃくりながら、良子も思いをぶつけた。それは叫びで、それは誇示で、それは決意で、それは覚悟で、それは悲しみだった。唯、絶望から逃げ出すための答えではなく、絶望の淵を駆け上るための選択だった。

「死ぬってとても怖いこと。でも、大切なものを守るために死ぬことは、大切なものを捨てて生きることよりもずっと幸福なことだと思う。私は唯死ぬんじゃない。守るために死ぬの。裕樹と裕樹の思いを、私の思い、そして私自身を守るために」

死は誰にも平等である。この不平等しか存在しない世界で唯一、誰にも平等に訪れるもの。それが死。いつか訪れるものならば、自らの生を満足な物にしたいと思うのは普通のことだ。それが例え、そのために命を捨てることになったとしても、間違いではない。生を充実したものにするための死。矛盾はいつだって正解に一番近い。

「そんなの理解できないよ」

「もう決めたの。ごめんね、亮」

それきり、亮は黙ってしまった。良子もまた喋ろうとはしなかった。

長い沈黙だった。そのとき、この映像が流れて初めて、裕樹、良子、亮以外の発する音が聞こえてきた。それは風の音。そしてそれに吹かれ地面に吸い込まれていく木の葉の音だった。木の葉は季節に紅潮され、真っ赤に染まったその身を地面へとどンドン投げている。雨のようだった。高台にある病院の窓からは、舞い散る木の葉なめの街が見える。それは何処か神秘てきなものだった。

誰も喋ろうとしない、沈黙の中で、風と木の葉の音だけが響く。それを幸成は心地いいとさえ思った。

長い沈黙の後、口を開いたのは亮だった。

「オレ、大学辞める」

突拍子もない一言。

「はあ？何言ってるの？」

「大学辞める。辞めて働く」

「だから何言ってるの？」

焦ったような声の良子に反して、亮の声は地に足が生えたように感じられた。

「お前が覚悟したならオレだって覚悟する。お前が裕樹を守ろうとするなら、オレだって裕樹を守る。お前がお前自身を守ろうとするなら、オレだってお前を守る」

強い、言葉だった。



「お前と裕樹が付き合ったからさ、言えなかったんだけど、オレ、お前が好きだ。何より大切なんだ。もちろん裕樹のことだって凄く大切なんだ。オレがお前らの思いを守るよ。オレが二人の子どもを守る。裕樹の守れなかった約束を、オレが代わりに守る」

強い、強い言葉だった。

「何言ってるのよ。私、死んじゃうんだよ？わかってる？」

「分かってる」

「分かってないよ、亮は」

「分かってるよ」

「分かってな・・・」

「分かってる」

良子の声を遮る。その声は風と木の葉の音を掻き消した。

若さとは根拠のない自信である。人は歳をとれば安定を求めようとする。それは間違ったことではない。むしろ正しいとさえ言える。それでも、それを無視してしまうほどのエネルギーを持っているのが若さだ。亮の思いもその若さからのものだった。儚いものは美しい。若さもまた、儚く、限りなく美しい。

「好きなんだ、裕樹のこと。愛してるんだ、良子のこと。守りたいんだ、お前らの思いを。だから・・・」

大きく息を吸い込む。それは体の中に入ると血と混ざり合い、体中を駆け巡る。やがて、それは力となり、揺ぎない意思と、無欠の言葉となる。

「結婚しよう」

木の葉たちのダンスは、既に終わっていた。

## 第十八章 邂逅その6（後書き）

疲れた。疲れました。中々思い通りのものが書けない苛立ち。そして自分の能力の無さ。なんて駄目な作者なのだろう。そんなことを思う今日この頃です。

感想、お待ちしています。力を下さい。お願いいたします。

## 第十九章 邂逅その7

「結婚しよう」

その言葉を最後に、そのシーンは終わった。今までどおりブラックアウトする映像。

「もう、これ以上何が起きても動じない」

闇のような暗さを得た画面を見つめながら、幸成はそう思った。

いともたやすく、その思いは壊されることも知らず。

月明かりに照らされる病室。それは恐怖さえ感じさせる。また、風の音と木の葉の舞い散る音だけが聞こえる。

窓からは闇夜に身を潜めた街を温かく見守るような、満月が輝いているのが見える。

正確な時間は分からない。月の輝きが夜の深さを知らせてくれるが、正確な時間は、分からない。

世界にはたくさんの生物が息づいている。それは想像もできないほどの数で、あまりにもリアリティに欠ける数だ。しかし、現実には幾多の生物が生を育んでいる。あるものは捕食され、あるものは孤独に、あるものは明朗に。世界のどこかで、今頃、抱えきれないほどの幸せに包まれている人間だって必ず存在する。自己との対比を

すると、それが疎ましくてならない。雨は全ての者に降り注ぐのに、人は時として、雨に打たれるのは自分だけであると感じる弱く卑しい生き物である。雨が降れば大地は力を取り戻し、そこに立つ者に力をくれる。それが分かっているながらも、人は雨を嫌う。

弱さを知らぬ者が強さを知るはずが無い。痛みを知らぬ者が優しさを知るはずが無い。真理とはコインのような物で、両側を見ることでできて初めて、そのコインの裏表を知ることができるのである。何も書かれていないコインの裏表を分かる人間は存在しない。裏と分かる表記があるからこそ、そちら側が裏と分かり反対側が表であると初めて分かるのである。正を知るにはいつだって負を知る必要がある。他人に傷つけられたことのない人間が、他人に優しくすることができないように。

雨が降れば、生が根付く。悲しみがあるからこそ喜びが現れる。それを知っている人間は数多くいるのに、実際にそれを心に常に携帯し行動をする人間は少ない。否、存在しない、と言ったほうが正確かもしれない。なぜならば、人は例外なく、雨を嫌うからだ。

幸成もまた例外ではなかった。親のいない子どもはたくさんいる。愛を知らずに育つ子どもの数は計り知れない。食べる物も無く餓死する子どももいるだろう。それらの者に比べれば考え方によつてはマシなのかもしれない。それでも、この世で自分は一番不幸だ。そんな風に考えてしまうのが人間であり、幸成もまた、同じであった。

真実を知りたいからこそその記憶の注文。結果として幸成を苦しめるだけのものであるが、それが彼の感情をさらに加速させる。自分は不幸だ。そんな風に考えることしか出来ない。周囲から見れば完璧な彼は、限りなく不完全だった。

「死を受け入れるって、どんな感じなんだろう」

彼には当然分からなかった。

風の音の間に、ある音が聞こえてくる。

強く吹く風の音で聞こえなかった。そのすすり泣く音が。

泣いている。風と同じように。

良子のすすり泣く音が暗い病室を包む。

「怖いよお」

枯れた声。

「死にたくないよお」

枯れた心。

「ひろきい、たすけてよお」

亡き者に求める救い。

「生きていたいよお」

死を簡単に受け入れることの出来る者がいるだろうか。若さが共存する肉体をもつ者ならそれは難解だ。若さとは根拠の無い自信であるが、同時に、限らない弱さだ。生きるために死ぬことを受容するには、良子はあまりにも若すぎた。

「失いたくない。失いたくない。でも、怖いよ」

「誰か助けてよお」

「死にたくないよお」

死を受け入れても、受け入れようとしても、若さがそれを拒絶しようとする。守るために死を選ぼうとしている良子にとって、それはかくも残酷だった。

目の前で、母が泣いている。死という事実から無尽蔵に生み出される恐怖に、心を崩されている。数日前に見た母の姿と重なる。自分のしたことが、自分自身が憎くてならない。

「死にたくない」

風の奏でる伴奏に乗せて、良子の儚い願いが、幸成の心を貫く。

恐怖を克服したわけではなかった。それでも、守りたかった。

だからこそ、亮に言ったのだ。死んでも、産むと。

「死にたくない」

それを亮は聞きいれた。彼なりに苦渋の決断だったであろう。

それでも、彼も、守るために自分を捨てようと決意した。

だからこそ「結婚しよう」と言った。

「死にたくない」

人はかくも弱い。

子どもにとって親とは絶対的な存在。

その親の弱さ。そして強さ。

「死にたくない」

前進しようとする心は固い。

逃避しようとする心は脆い。

「死にたくない」

人はあまりに弱い。

人はあまりに汚い。

「でも・・・絶対、あなたは守るから」

しかし、子を思う親の心は、どんな鉄壁の城よりも堅牢だ。

「必ず、守るから」

子を思う親の心は、どんな美しい空よりも、淀みが無い。

「死んでも・・・守るから」



母の泣き声が、幸成の心を押しつぶしていった。

嗚咽がいつまでも響いていた。

## 第十九章 邂逅その7（後書き）

あえて、毎回二千字程度の短い内容でお送りさせていただいています。ご理解下さい。

感想、お待ちしております。よろしくです。

## 第二十章 邂逅その8

「良子」

お決まりの暗闇の後、亮の声だけが響く。

「良子」

励ましの声だけが響く。

ゆっくりと映像が現れる。

亮の顔が大きく映し出されている。

「頑張ったな、良子」

そう言つと、安心しきつたように睡魔に身を委ねた赤ん坊を良子の眼前に抱える。

「お前の子だぞ」

「おまえと、裕樹の子だ」

シュー。シュー。

呼吸器をつけているためだろうか。そんな音が定期的に聞こえる。

「ほら、お前らの子だぞ」

「元気な男の子だ」

子どものように、亮はぼろぼろと泣いている。これからの未来が頭によぎっているのだろうか。

良子の手がゆつくりと赤ん坊に伸びる。その手はあまりにも細い。細すぎる。骨と皮しかない。

ゆつくりと、丁寧に自分の子どもを抱きかかえる。

「可愛いだろ？お前ら二人の子なんだから可愛いのは当たり前か。可愛いだろ？なあ？」

亮の問いに答えるだけの力がないのだろう。良子は言葉を発しない。

「今から、手術だつてさ。帝王切開したばかりだし、体力の回復を待ちたいけど、これ以上は無理なんだつて。だから、今から緊急手術だつてさ。大丈夫。助かるよ、お前は。オレとこの子と、裕樹がついてる。安心しろ」

涙を流しながら、亮は話し続けた。

「この子、名前、何にしようか？前にさ、お前に聞いたら、もう決めてあるって言ってたよな？なんて名前に決めたんだ？」

答えは返ってこない。

そばにいた医師たちの手によって、手術室へと運ばれる。

「頑張れよ。この子と待ってるからな。絶対、元気になるんだぞ」

子どものように泣きじゃくる亮の声は、ガラガラに枯れている。

そのとき、良子の口が少しだけ動いた。

「なんだ？どうした？」

良子の口元に耳を近づける。蚊の羽音のような細かい声で、良子が言った。

「幸せに・・・成るって・・・書いて・・・ゆきなり」

精一杯の声だった。

「ゆき、なり・・・。幸成か。世界で一番幸せに成る。だから幸成だ。お前の名前は幸成だってよ。幸成だってよ」

移動式のベッドに乗った良子の体が、手術室へと運ばれていった。

遠くで声がする。

「頑張れ。待ってるからな、幸成と二人で」

赤ん坊の泣き声も、亮の叫びにつられて、聞こえてきた。

## 第二十一章 ビデオテープその2

ここで映像は終わった。

父さんと赤ん坊の泣き声を最後に、砂嵐が世界を包んだ。

オレは、父さんの子じゃない。

別の男の子ども。

オレは、母さんが命と引き換えに少しでも産もうとしてくれた子ども。

オレは、幸成。幸せに成るって書いて、幸成。

幸せに成って欲しいから、そう、名付けられた。

他人の子どもを自分の子どもとして育てるなんて、どうかしてる。

命と引き換えに子どもを産もうなんてどうかしてる。

馬鹿じゃないの。

まともな神経なら出来るはずがない。

それでも産んでくれた。

それでも育ててくれた。

知らなかった。

知るはずもなかった。

知ってよかった。

知らないままではなくてよかった。

「オレは望まれて産まれた子どもだった」

たくさん聞きたいことがある。

たくさん言いたいことがある。

「今でも愛されているのだろうか」

それはこのビデオからは把握できない。

結局、一番知りたいことはわからないままだ。

でも、それでもよかった。

「とりあえず、オレは愛されて産まれて来た」

その事実だけで十分だ。

他の物まで望むのは高望みという物だ。

すくなくとも、笑顔は取り戻せた気がする。

このビデオテープの内容に関しては黙っておこう。

誰にも、まして両親には黙っておこう。

今までどおり、振舞えばいい。

変に混乱させるのも間違ってるだろうし。

「でも・・・」

「やっぱり知りたかったなあ、今愛されてるかどうか・・・」

聞けるはずもない。

聞いていいはずもない。

こんな風に、産んでくれた母親に。

そして、育ててくれた父親に。

聞いていいはずがない。

産んでくれただけで。

育ててくれただけで。

十分すぎる。

愛してくれなんて、わがままだ。



十分だ。

十分だ。

「っていつか、聞くきつかけもないし」

時計の長針は3に差しかかろうとしていた。

土曜日は母親の帰宅が早い。そろそろ帰ってくるころだろう。

「さて、ビデオ片付けなきゃ。こんなの母さんに見つかったらなんて言ったらいいか。っていつか非現実的にも程があるし」

ビデオの停止ボタンに指を伸ばそうとした、その時だった。五月蠅い砂嵐が止み、とある映像を映し出した。

見たことの無い場所だった。

しかし、見覚えがある気がする。

どこだろう。

知らない場所。

でも、どこか、何故かは分からないが、知っている場所。

何年も前に行ったような記憶がある場所。

「よいしょっ」

子どもの声がした。

「よいしょっ」

長く続く坂道を一生懸命歩いているのだろう。

「幸成、大丈夫？」

母の声。

その声と同時に斜め下を向く。

そこには小さな男の子。

「大丈夫」

額にはうつすら汗が滲んでいる。

「オレ・・・か？」

男の子は一心不乱に歩を進めている。

「おんぶしてやろうか？」

どこから聞きなれた声が聞こえてきた。父さんだ。

「いい。大丈夫」

男の子は少し微笑みながら答えた。

どこだろう。見覚えがあるような、ないような。

男の子は見た感じ二、三歳ってところだろうか。

「ということは、十二、三年前か。覚えてるわけないわな」

やがて小高い丘に三人はつく。

そこには、数え切れないほどの墓が列を作っている。

「お墓ってどこか覚えてる？」

そう言いながら父さんは困った顔をした。

「忘れないように覚えておいてよね」

母さんは男の子の手を引きながら言った。

「三三七拍子」

「は？」

「ここから三つ目のお墓まで行って、そこをまた三つ目のお墓まで右に行くの。そしたら、次は七つ目のお墓まで上る」

「三三七拍子ってわけ？」

「覚えやすいでしょ？」

「まあな。拍子の意味はわかんないけど」

「そのリズムで歩いていけばいいんじゃない？」

「てきとうだな」

三人は歩き出した。墓の数を数えながら。

「ひとつ、ふたつ、みっつ」

「ここを右に曲がる」

「ひとつ、ふたつ、みっつ」

「ここから上る」

「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、ななつ」

「じゅう」

そこには村上家之墓と彫られた墓があった。

「やつつ、ここのつ、じゅう」

まあ、普通は『とお』って言うんだが、ガキのころのオレは馬鹿だったのか。

「良子、幸成が十まで数えれたぞ」

「本当？すごいじゃない、幸成。私に似て頭がいいのね」

「アイツに似てたら頭悪いだろうしな」

父さんは笑っている。

その横で自慢げな男の子が映っている。

周囲の掃除をすると、花を添え、線香に火をつけ手を合わせた。

良子のもんと思われる両手が大きく映っている。

「母さん目線の映像だよなあ。最初から最後まで・・・」

あることに気づく。とんでもない違和感。

「両手合わせてるのに、どうやってビデオ撮り続けてんの？」

最大の謎が残った。

映像は誰が撮っているものなのか。

現に母さんは両手を離した。

それでも映像はなんのブレも無く続いた。

「結論、カメラマンは母さんじゃない・・・。じゃあ、なんなんだよ。誰が今まで撮ってたんだよ」

分かるはずもない問題に頭をひねるが、当然、答えは浮かばない。

結局、答えは出ないままだな。

「だれのお墓なの？」

男の子が無邪気に言った。

「大事な人よ」

母さんは優しい口調で返した。

「大切なひとだ」

父さんも優しい声だ。

「お父さんとお母さんの大事な人なら、僕にも大事な人」

そう言うと、男の子は手を合わせた。

その映像を最後に、こんどこそビデオは終わった。自動で巻き戻しを始めたからだ。

「・・・行ってみたいな」

きっかけは、それで十分だ。

## 第二十二章 速水亮

満員の電車に揺られる。朝、晩。それが日常。

昼は下げたくもない頭を下げて、家に帰れば泥のように眠るだけ。  
下らない毎日かもしれない。

それでも、後悔はしていない。

駅に着くと、大きなクリスマスのイルミネーションが眩しいほどに煌いていた。

クリスマスが過ぎれば正月。どちらもおレにとっては無いに等しい。どうせ休日返上で働かなきゃならないのだから。

「もう何年もクリスマスや正月に家族と過ごしてないな」

小声で呟くと寒気から身を守るためにコートに両手をつ込む。  
しかし大した暖はこの程度では取れない。

先ほどの独り言が頭にこびりつく。クリスマスや正月？違う。家族で団欒なんてした覚えがここ何年もない。大した大黒柱だ。

世間の喧騒は耳障りで使命からの逃避を促す。それに身を委ねてしまえばそうになる自分に何度叱咤したことが。

数え切れないほど通った道。何の変哲もない、変わり映えのない、悪く言えば退屈な、よく言えば穏やかな道。これまで何度も通った

道は、今日も変化はない。

変化というのは心地のいいものでそれが無い日常ほど耐え難いものはない。大人になるということはその変化のなさに耐えうるだけの心を得るということだ。結局、耐えるという行為を苦と思わずにいられることが、大人というカテゴリーに属するための条件なのだ。それは大人と子ども、どちらにも片足を突っ込んだ状態の人間にとつては屈辱以外の何物でもなく、心を蹂躪されているようなものだ。それでも、それを許容することが出来なければ、結果として大人というカテゴリーに属することはできない。世にチャイルディッシュアダルトが闊歩するのも仕方無い。耐えるという行為は難解な行為であるからだ。

自分は大人であると認識したのはいつだろうか。初めてセックスをしたとき。高校を卒業したとき。成人式を迎えたとき。どれも違う気がする。

悩んだ挙句、結果答えは出なかった。

「今何時だろう?」

そう思いながら腕時計に目を配らず、どうせいつもと同じ時間だと自分に言い聞かせる。見るだけ無駄だ。

地面に向けられていた視線を前方に向けると、見慣れた後ろ姿があった。朝、いつも同じ時間の電車に乗り、夜、いつも同じ時間の電車で帰ってくる男。全くの赤の他人ではあるのだが、毎日自分と同じ行動をしているためか奇妙な親近感が彼に対して湧いていた。まあ名前すらも知らないのだが。



背丈は170cmほどだろうか。中肉中背。見た目は三十代前半もしくは三十代半ば程度に見えるのだが、白髪の多さは年配を連想させる。きつと後姿だけを見たら五十過ぎであると思われるに違いない。意に反するだろうに。

子どもの頃は大人に見られたかった。一歳でも年上に見られるように、大人びて見てもらえる様に気を使ったものだ。気がつくとその考えは一変していて、少しでも若く見てもらおうと思うようになる。若さに特別憧れがあるわけじゃない。それでも人は歳を取れば若さに魅了されていく。若さとは繁栄で、老いとは衰退。欲するのも仕方が無い。衰退なんて好む人間はいはしないのだから。若さが欲しいのではない。繁栄の状態にいつまでも身を起きたいだけなのだ。衰退はやがて消滅へとつながるのだから。

目の前の男も例外ではないだろう。きつとその白髪の一本一本に憎しみの念を抱いていることだろう。かといって老いと向き合うことから目を背けることは出来ない。それは自分の否定になってしまいうからだ。

自分の否定とは迷い。迷いとは弱さ。弱さを抱えながら生きることとは容易ではない。その弱さを強さに変えることが出来なければ、生きることとは難しい。

しばらく歩くと細い路地が見えてくる。そこでこの名前も知らない友人とはお別れだ。

彼と別れたら家はすぐそこだ。もう見えてくる。

ほら、見えてきた。

ゆっくりとインターホンを押す。確認もせずに扉は開くだろう。

ほら、開いた。

「おかえりなさい」

「ただいま」

良子もつい先ほど帰宅したのだろう。どこか疲れて見える。

大した会話もせぬまま居間へと向かう。

「ご飯にしょっか」

「ああ。腹減った」

鞆とコートをソファーに無造作に置くと、テーブルにつく。おつと、その前にビール。冷蔵庫の中の冷えたビールを取り出す。触ると痛いほどに冷たい。

「このために生きてるってかんじだよなあ」

そう言いながら飲む。ビールは美味しい。

いつからだろう。昔はビールなんて大嫌いだった。コーヒーもブラックでは飲めなかった。気がつくともビールもコーヒーも好んで飲むようになり、朝のコーヒー夜のビール。これがないと苛々するほどになっていた。

「これも大人ってカテゴリーに属するための条件かもな」

言い聞かせるように呟くとこれまた勢いよく飲む。美味い。

一息つくとテーブルに夕食が並んだ。いつもの買ってきた惣菜だ。

「今日も美味そうだ」

悪態をつく。

「ごめんね。いつもちゃんと料理作れなくて」

申し訳なさそうな良子。その表情を見てしまったと思う。

「いや、仕方ない。お前だって毎日毎日大変なんだ。朝から晩まで働いて、その上飯まで作れなんて言えないさ。まあ、たまには作ってくれよ。休みの日でいいからさ」

「ええ。あまり上手じゃないけれど」

「昔から進歩はないな」

「うるさいなあ」

良子は昔から料理が苦手だった。というより家事全般が苦手だった。そんな良子に無理に疲れてる上に料理を作れたなんて言えない。オレがもっと給料多ければこんなことにもならなかった。そう考えれば、原因はオレ自身にあるのだらう。ほんっと、大した大黒柱だ。

「幸成は？」

「今呼ぶわね」

いつも通りメールで食事のお知らせ。無機質だと感じるのはオレが古い人間だからだろうか。なんでもかんでもメール頼みの世の中ってなんだかつまらない気がする。

「・・・オレだけか？」

「なにが？」

「いや、なんでもない」

幸成を待たずに先に食べる。これも恒例だ。

しばらく箸を進めていると幸成が二階から降りてきた。

「いただきます」

そう言つと幸成も夕食を食べ始めた。

無言の夕食。いつ以来だろう。一家団欒というものの存在がこんなに遠く感じるようになったのは。幸成が高校に入学してからだろうか。昔からどこか反発するところはあつたが最近のそれは目を見張る物がある。反抗期というものだろうか。ならば仕方ないことか。

それにしても相変わらずこの重苦しい食卓は好かん。なにか喋ってみるか。

「あのさ・・・」

先に口を開いたのはオレではなく幸成だった。

下を向いたまま幸成は続けた。

「明日って、なんか予定ある？二人とも」

明日。特に無いがたまの休日くらい家でのんびりしたい。「ごろごろして、先の一週間の栄養を蓄える時間にしたい。」

「特に無いが。どうかしたか？」

「行きたい場所があるんだけど」

行きたい場所？この歳になって遊園地だなんてことはないだろう。かといって見当は全くと言っていいほどつかない。

「どこだ？」

「今は言えない。けど行きたいんだ。だから明日一緒にそこに行つて欲しいんだけど」

「どこか言ってくれなければ行きようがないだろう」

「とにかく、お願いだから、明日あけておいてよ。お願い」

幸成が頼みごとをするのなんて珍しい。真夏に雪が降るようなものだ。横目で見た良子の困惑の表情も納得いく。オレも同じような顔をしているのだろう。

家族でどこかいくなんて何年もなかった。それに最近は幸成とも喧嘩ばかりで親子という形を成せていなかったように思う。たまには団欒もしなければならぬのかもしれない。

「わかった。良子もいいか？」

「ええ」

良子は困った顔のまま言った。

その言葉に幸成は、

「ありがとう」

笑顔で答えた。

息子の笑顔を見たのは何年ぶりだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7597c/>

---

記憶屋

2010年10月11日22時31分発行